HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響 ： 牛久市とホワイトホース市のケースについて
著者	井上，真蔵
引用	北海学園大学人文論集，31：21-121
発行日	2005-07-29

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響
── 牛久市とホワイトホース市のケースについて ──

井　上　真　蔵

はじめに

カナダの都市と姉妹都市関係を締結している日本の自治体は，市町村および都道府県を含めると，2005年現在，76件である。そのうちの26件が北海道の自治体であり，全体の3割以上である。地域として次ぎに多いのが東京都の首都圏周辺地域である。東京都，神奈川県，千葉県，茨城県，埼玉県の区市町村を合わせると14件となっている。

この14件という提携数は，北海道の提携数の約半分である。北海道の自治体の場合には，気候や地理あるいは産業などの面で類似点があり姉妹都市関係に至ったケースが多く，ある意味で「似た者同士」の付き合いが行われている。それでは14の自治体の場合は，どのような理由で提携に至り，どのような活動をしているのだろうか。

本稿では，それらの中から，牛久市とホワイトホース市との姉妹都市関係を取り上げてみたい。一見して，地理的にも，都市の状況からも，非常に対照的な自治体同士のように思われる。牛久市は世界的大都市東京の近郊に位置し，一方ホワイトホース市は，まさに〝True North〟とも言うべきカナダの中でも北の大地に位置している。このような意味においても，非常にユニークなケースであると言えよう。

さて，この牛久市とホワイトホース市との関係について，本稿は，その活動の全体像といくつかの重要な特徴と問題点を明らかにしようとするものである。具体的には，以下のような基本的な問いに対して答えようとするものである。

牛久市が，1)「なぜ，どのようにしてカナダの特定の自治体と姉妹都市関係を結ぶようになったのか」，2)「どのような活動を行っているのだろうか」，3)「どこの部署がどのように担当しているのだろうか」，そして，4)「姉妹都市関係の活動を通じてどのような影響が見られるのだろうか」。

本稿を執筆するにあたって，主な資料は牛久市役所および牛久市教育委員会から提供していただいたものと，牛久市役所にて行った聴き取り調査に基づくものである。

聴き取り調査にあたっては，姉妹都市の現場に携わってこられた以下の方々のご協力をいただくことができました。貴重な時間を割いていただき，ここに厚くお礼申し上げます。(以下，敬称は省略)

野口克己（企画部広報公聴課）

鈴木　亨（企画部広報公聴課　副参事）

岡田　晋（牛久市教育委員会　教育総務課）

(場所：牛久市役所，日時：2003年11月5日)

Ⅰ．提携の経緯

牛久市とホワイトホース市とは，1985年4月19日に姉妹提携を締結している。日本とカナダの姉妹都市関係は76件（2005年現在）あるが[1]，そのうちの25番目であり提携時期としては割と早い。カナダとの姉妹都市提携において，普通はカナダの10州のいずれかの州にある都市が提携先となっている。しかし牛久市の場合には，これらの州ではなくユーコン・テリトリーという準州の都市が提携相手である。準州の都市と姉妹関係にあるのは，日本全国で牛久市ただ一つである。

ホワイトホースは，カナダの準州の一つユーコンテリトリーの首都であ

---

[1] 76件の中には，北海道とアルバータ州との姉妹都市提携を含む。「カナダ・日本姉妹都市リスト」，在日カナダ大使館ホームページ，http://www.canadanet.or.jp/p_c/sistercity.shtml

り人口は2万人弱である[2]。ユーコン準州は，ブリティッシュ・コロンビア州とアラスカの間に位置している。ユーコンと言っても日本では一般的に馴染みがない。しかし，ユーコン川での鮭釣りやカヌーでの川下り，あるいはオーロラなど，アウトドアー派にとっては一度は訪れたい「憧れの場所」である。一方，牛久市は茨城県の南部に位置し，上野駅からJR常磐線で55分，首都東京から50 kmの距離の所にある。人口は約75,000人の都市である[3]。

姉妹都市関係にある都市は，地理的，産業的，歴史的，あるいはその他の点で，何らかの類似性が縁となって提携にいたるのが一般的である。しかし，牛久市とホワイトホース市との場合には，いわゆる一般的な条件は全く見当たらない。それでは，どのようにして姉妹都市提携に至ったのであろうか。

事の発端は，カナダ物産展である。当時，牛久駅の西口にあった西友でカナダ大使館後援によるカナダ物産展が開かれていた[4]。1980年代当時，カナダ大使館後援によるカナダ物産展が，東京都内やその周辺で開催されていたが，牛久市の場合も牛久駅西口の西友でのカナダ物産展が切っ掛けとなっている。この時，カナダ大使館から13本のメープルの木がプレゼントされ，牛久市役所や小中学校に記念植樹されている[5]。もちろん，これだけ

---

[2] 2001 Community Profiles, Statistics Canada, http://www12.statcan.ca/english/profil01/Details/details1pop.cfm?SEARCH=BEGINS&PSGC=60&SGC=6001009&A=&LANG=E&Province=All&PlaceName=Whitehorse&CSDNAME=Whitehorse&CMA=&SEARCH=BEGINS&DataType=1&TypeNameE=City%20%2D%20Cit%E9&ID=13445

[3] 「数字で見る牛久」，牛久市のホームページ。http://www.city. ushiku.ibaraki.jp/whatushiku/toukei.htm

[4] 牛久市役所でのインタビュー。

[5] 7校の小学校，5校の中学校と市役所に植樹された13本のメープルの木は枯れたそうである。甘いので虫が入りやすく，手入れが難しいとのことで

で姉妹都市提携に至るわけではない。

まず牛久市側としては，時代の潮流とも言うべき国際化という要因と市長のイニシャチブに依る所が大きい。「ホワイトホース市との交流」には，次のように述べられている。

> 伸展する国際社会の中で，地域における都市間交流は，市民に外国に対する関心を深める身近な機会であるばかりか，自ら参加することにより，自分が国際社会の一員であるという意識改革にもつながり，ひいては地域の活性化へと結びつくものです。
>
> 特に，次代を担う青少年に国際交流の機会を提供し，視野の広い国際感覚と郷土愛に満ちた人間性をやしなう事業を積極的に提供する必要性が高まっていました[6]。

このような状況の中で，実際に姉妹都市提携に進めていったのは，当時の町長の積極的な行動による所が大きいが，それでも相手側の都市がホワイトホースという必然性はなかった。そこには，まさに偶然とも言うべき縁が存在していたのである。市役所の担当職員の方は次のように語っている。

> 当時の大野正雄という町長がおりまして，カナダに行ったことがあるんですね。良いところだから付き合ってみたいんだがと大使館側にして，たまたま，その時に大使館にホワイトホースの市長さんが大使館に居らっしてたんですって。1時間ぐらいだったら，じゃ，東京からだから行ってみようかって，来たんですよ。その時に，大野町長がまた居たんです。それで気が合っちゃいまして。縁があったんですね。向こうに帰って，向こうの議会もありますね。それで，向こうの方が

あった。

[6] 「ホワイトホース市との交流」，牛久市役所，2ページ。

先に，しましょうと言ってきたんです。こちらは，丁度筑波科学博の始まる頃ですけれども，その時また日本に来るんで，じゃあ調印でもと言うことで。それまでの間に，1年くらいは手紙のやりとりなどしたり，子供の絵を交換したり，習字交換したり，そういう交流はあったみたいですね[7]。

このように，ホワイトホース側も市長が東京のカナダ大使館に来ており，また自ら牛久市に出向くなど，積極的で迅速な行動をとっている。当然のことながら，そこには観光客誘致ということが大きな要因であったと言えるだろう。事実，牛久市の職員の方も「ホワイトホースとしては，観光にも力を入れたいということで，姉妹都市関係を結ぶにしても，カナダ観光局などにPRすることも何度かあったようです。」[8]と語っている。

ところで，一般的にカナダとの姉妹都市提携盟約書には，日本での商品販売や産業経済関係の発展が念頭にあることが多く，「経済関係に関する事項」が明記されていることが一般的と言える。しかし，牛久市とホワイトホースとの姉妹都市提携盟約書には，「経済や産業の発展」などの言葉は見当たらない。首都圏東京の近郊にある自治体で，ホワイトホースと「何とかつり合う規模の町」がホワイトホース市長の頭にあったと思われる。そうすれば，ユーコンの大自然に，東京およびその周辺からの観光客誘致も現実味を帯びることになるからである。ちなみにホワイトホースのホームページからTour Yukonユーコン観光局のホームページに入ると，「ハイキング，バイキング，カヌー，カヤック，ラフティング，フィッシング，ハンティング，オーロラ・ビューイング」などがあり，日本語のホームページも用意されている[9]。

---

7 牛久市役所でのインタビュー。

8 牛久市役所でのインタビュー。

9 Tour Yukonユーコン観光局，Tourism Yukon Information，http://www.touryukon.com/ ホームページは英語の他に，フランス語，ドイツ語，

ユーコン観光局の日本語版ホームページより

以上のように提携に向かって進行する状況の中でも，やはり「姉妹都市」という言葉のニュアンスと現状との間のギャップについては，多少の戸惑いもあったようである。担当職員の方は次のように述べている。

> 牛久とホワイトホースでは，共通するものがないですからねー。ま，何もないけれども，当時の担当の話では，姉妹都市を結んでいいのかどうか，やっぱり偏見というものがあったようですね。その時，カナダ大使館の方に相談したところ，そんなに深刻に考えないで，まあ，遠くに親戚が出来るような感じで考えればどうですか，と言われたそうなんです[10]。

こうして1985年4月19日，つくば科学万博会場カナダ館にて姉妹都市

日本語で作成されている。これらは，英語版ホームページの翻訳ではなく，それぞれの国の観光客の好みに応じてページが作成されているようである。日本語版は http://www.yukonjapan.com/

10　牛久市役所でのインタビュー。

提携の調印を行い，翌年，100名の市民訪問団がホワイトホースを訪れることになる。担当の職員の方は，その時の100名の訪問団が収まりきれない写真を前にして，次のように語ってくれた。

> やっぱりホワイトホースと言った時には，地理的には知らなかったでしょうからね。1年間，こう交流をやった時にも，やっぱり知っている人は少なかったでしょうから。姉妹提携をした次の年に市民団で行ったんです。その時の写真です。100人の市民団で[11]。

以上のようなことから，提携の経緯はまさに「縁があった」としか言いようがないのであるが，そこがまた実務担当される現場の職員の方には苦しい所でもある。その点に関して，担当の方は次のように述べている。

> 最近，突っ込まれると，やっぱり。では，なぜカナダのホワイトホースなのかと。そこと姉妹都市を結んで送り出すという意味というのは，どの辺に求めるのかな，という議論まで行くと... まあ，姉妹都市関係を結んでいる所はイッパイある訳で，どうしてもそこでないといけないか，と言うと，それは縁があったからだったと... [12]。

この話を聞かせてもらった時，筆者は次のように答えたものである。

> それは，そうです。「それじゃ，あなたは，どうして今の奥さんと結婚したのですか？」って。奥さんと結婚して不幸であれば離婚しても良いでしょう。しかし，縁があって結婚し，結婚することによって，二人でしか出来ない事ができるとすれば，それは相手が奥さんだったからではないのでしょうか？　ホワイトホースについても，縁があって結

---

[11] 同上。

[12] 同上。

ばれて，ホワイトホースとしか体験できないような事を，牛久の青少年たちは体験している訳でしょう。そんな関係を育て発展させていくことが大事な事ではないでしょうか[13]。

カナダ大使館に仲介されるまでは，縁も所縁もなかった日本とカナダの二つの都市が，まさに縁により姉妹提携をしたのである。以来，今日に至るまで表[14]に見るような活発な活動を行っているのである。

II．交流活動

1．概　要

それでは，牛久市とホワイトホースとは具体的にどのような交流活動をしているのだろうか。1985年の姉妹都市締結の年から2001年度までの間に行われた相互交流活動の実体は，表に示される通りであるが，全般的に活発な様子が窺える。また，それらの交流は，表からも分かるように次の5つの種類に分類される。それらは，(1)市長の相互訪問，(2)市民親善団の相互訪問，(3)市民の訪問，(4)青少年の相互派遣，(5)絵画，書，写真などの相互交換である。それぞれの特徴について簡単に触れておこう。

(1)　市長の相互訪問

まず，牛久市が市になる前の牛久町の時に，町長が1度ホワイトホースを訪れている。ホワイトホース市からは，市町が3度牛久市を訪問している。この表で見る限り，首長同士の相互訪問の頻度は多くはないが，ホワイトホース市側の方の回数が多くなっている。そしてブラニガン市長の3

13　上記インタビューにて，質問に対する筆者の回答。

14　「姉妹都市提携及び姉妹都市委員会の経過報告」と「昭和60年度総会設立議案」より作成。ホワイトホースの議会も，牛久との姉妹都市関係は活発であるとの認識をしている。「ホワイトホース市議会議事録」(Regular Council, June 14, 2004)

これまでの主な交流事業「ホワイトホース市との交流」	
昭和58（1983年）	11.16日　カナダ大使館より13本のメイプルツリーが贈られる。
昭和59（1984年）	2.28日　ホワイトホース市長，D.ブラニガン市長夫妻来町 3.30日　ホワイトホース市長，D.ブラニガン市長から姉妹都市提携の申込の手紙 5.29日　D.ブラニガン市長宛，継続して交流を続けたい旨の手紙 11．9日　町内小・中学校の児童・生徒の図画（250点），習字（208点）の作品をホワイトホース市へ郵送
昭和60（1985年）	・ブラニガン市長他3名来町 ・姉妹都市提携調印式（科学万博会場カナダ館にて） ・ホ市小中学生の作品巡回展（図画等80点） ・町長，議長ホ市へ表敬訪問 ・ブラニガン市長とご子息牛久滞在（約5ヶ月間） ・デビッド・シンプソン氏来市
昭和61（1986年）	・アトキンズハリー，ヨシコ夫妻来市 ・第1回市民親善訪問団派遣 ・パウル・ニュージェント父子来市 ・姉妹都市交流写真展開催 ・デビッド・ハリソン氏夫妻来市
昭和62（1987年）	・第1回ホワイトホース市民団来市（22名） ・姉妹都市交流写真展開催 ・第1回交換青少年派遣 ・デビッド・ハリソン氏夫妻ら来市 ・デビッド・シンプソン氏来市
昭和63（1988年）	・市内小中学生の書き初めや絵画（84点）送付 ・キース・スマーチ氏来市 ・第2回市民親善訪問団派遣 「ふれあいの像」贈呈 ・第1回交換留学生来市 ・第2回交換留学生派遣 ・コーション氏（彫刻家）来市
平成元年（1989年）	・デビッド・シンプソン氏来市 ・第2回ホワイトホース市民団来市（11名） ・第3回交換青少年派遣 ・片桐康幸氏，ユーコン大へ語学留学（9ヶ月）
平成2年（1990年）	・デビッド・シンプソン氏来市 ・ユーコンゴールドミッドナイトマラソンに牛久市民（高山和裕氏）初参加，ハーフマラソン10位入賞 ・第4回交換青少年派遣 ・マクガイヤー一家来市 ・デビー・リチャードソン氏来市 ・安斉博幸氏，ユーコン大学へ語学留学（9ヶ月） ・アイリーン・マリーン氏来市 ・ホ市から「友好の証」プレート寄贈（自然観察の森の竣工を記念して）
平成3年（1991年）	・第5回交換青少年派遣 ・リチャードソン夫妻来市
平成4年（1992年）	・デビー・リチャードソン氏来市 ・ペドレス夫妻来市 ・デビッド・シンプソン氏来市 ・第2回交換留学生来市 ・第6回交換青少年派遣 ・第3回市民親善訪問団派遣
平成5年（1993年）	・マクガイヤー君来市（1年間牛久に滞在） ・第3回ホワイトホース市民団来市（8名） ・第3回交換留学生来市 ・第7回交換青少年派遣

これまでの主な交流事業「ホワイトホース市との交流」	
平成6年（1994年）	・オードリー・マクロフリン氏（ホ市在住カナダ国会議員)来市 ・第4回交換留学生来市 ・第8回交換青少年派遣
平成7年（1995年）	・第4回ホワイトホース市民団来市（26名） ・第5回交換留学生来市 ・第9回交換青少年派遣
平成8年（1996年）	・マイケル・クレイガン氏一家来市 ・第6回交換留学生来市 ・第10回交換青少年派遣
平成9年（1997年）	・第7回交換留学生来市 ・第11回交換青少年派遣 ・第4回市民親善訪問団派遣（28名）
平成10年（1998年）	・第8回交換留学生来市 ・第12回交換青少年派遣
平成12年（2000年）	・第9回交換留学生来市（15名）
平成13年（2001年）	・ゴールデンホーン小学校児童から千羽鶴の寄与

度目の訪問の時には子息を伴っており，その子息が牛久市に5ヶ月ほどの長期にわたり滞在している。このように，どちらかと言えば，カナダ側の訪問回数が多いことと，プライベートな側面が見られるのが特徴である。

(2)　市民団の相互訪問

市民親善団の相互訪問に関しては，それぞれ4回の相互訪問を行っており，2年に一度程度の頻度である。規模としては，それぞれ20名前後である。これらの規模と頻度という点では，ホワイトホースの人口規模を考えれば，かなり活発であると言える。牛久側の第1回目の訪問団は100名という大規模な団体となり，人口19,000人のホワイトホースにとっては宿泊の面でも大変であったようであるが，姉妹都市牛久の存在を印象づけたものと思われる。以上のような状況なので，市民親善団のレベルの相互訪問は順調であると言えよう。

(3)　市民の訪問

ホワイトホース市の市民が，市民親善団とは別に，しかも頻繁に牛久を訪れているのが，大きな特徴である。16年の間に，延べにして20件の訪問である。表からも分かるように，5回訪問した人が1人，3回訪問した人が1人，2回訪問した人が2人，1回だけの人が8人となっており，何度も訪問している人が目立っている。また，夫妻や家族での訪問は，カナダ側の一般的なパタンであるが，ここでも同様である。さらに，マクガイヤー

家の子息は，一度目は家族と共に訪問し，別の機会に再度訪問して1年間に渡って牛久に滞在している。このように，市民がかなりの数，しかもプライベートな形で訪問しているのが，一つの大きな特徴であると言える。

ホワイトホースからの市民レベルでの訪問に相当する牛久市からの市民訪問は見られない。しかしながら，2人がユーコン大学へ，それぞれ9ヶ月間語学留学をするなど，相互間での取り決めはないものの，姉妹都市の影響であると言えよう。また，牛久市民（高山和裕氏）が，ユーコンゴールドミッドナイトマラソンに初参加して，ハーフマラソン10位入賞するなども，姉妹都市の縁によるものであると言えよう。

以上のように，市民レベルではホワイトホース市民の方が，はるかに活発であり，さらにプライベートな側面も見られるのが，大きな特徴であると言える。これはカナダ側が比較的休暇が取りやすいということにも関わっているのかも知れない。

(4) 青少年団の相互派遣

青少年の相互訪問は，姉妹提携関係ではよく見られる形式であるが，牛久市の場合は表からも分かるように，他の姉妹都市のケースとは異なる特徴が存在している。団員は「市内に在住する高校生もしくは相当の年齢の者」とあり，実質的には高校生であり，これは普通であろう。しかし，団長に関しては，団長・副団長とはなっておらず，団長が2名なのである。しかも，団長の資格として，「市内在住もしくは在勤で，応募時に20歳以上35歳くらいまでの者　日常英会話が可能で団員の指導能力を有し，帰国後積極的に姉妹都市交流活動に協力できる者」となっている。実際，インタビューの時に，大学生も団長として引率して行っているという事を伺った時には，正直かなり驚いたのは事実である。しかし，「高校生の時に行ったことがある子も多くって」[15]ということで，大胆は試みではあるが，リーダーを育てる一つのやり方かも知れない。ちなみに，団長は費用の1/2，団員は1/3の補助を受けている。派遣団の規模は16名となっている。団員に

---

[15] 牛久市役所でのインタビュー。

関しては希望者は全員行ける方向で考慮されるが，団長に関しては不適格となったことが過去にあったとのことである。さらに，この種の訪問団の派遣は，一般的に隔年毎というのが普通であるが，牛久市の場合は毎年派遣しており，この点も特徴的である[16]。

このような牛久市の活動に対して，回数は9回と多少劣るものの，ホワイトホース市側からの活動も，活発なものと言ってよいだろう。しかし，派遣団の構成員に関しては，中学生も混じっており，時には小学生も居るとのことである。このように，かなり融通が効くようで，日本側と比べて，ここにもプライベートな側面が見られる。

(5) 絵画，書，写真などの相互交換

表にもあるように，絵画，書，写真などの相互交換が行われている。このタイプの交流活動は，インパクトの点からしても，あまり重要視されることもないし，付け足し程度の扱いしかうけないのが普通である。しかし，後に見るようにホワイトホースのホームステイの人たちは，日本に対して非常に高いセンシティビティを持っているようであり，そのような視点から考える必要があると思われる。牛久市内の小・中学校の児童・生徒の図画や習字の作品をホワイトホース市へ郵送している。そして，2001年には，ゴールデンホーン小学校児童から千羽鶴が送られてきている。上のような

16　この項に関しては，インタビューを行った時点のことである。現在では，ここに述べた資格や条件とは異なっているようであるが，本論文で扱うホワイトホースへの訪問団は，現在の募集要項に基づいたものではないので，本文中には触れていない。なお，新たに変更されたのは，次のような点である。団員の条件として，「高校生もしくは相当の年齢の者」が，「中高生もしくは中高生相当の年齢の方」となり，中学生を含むようになった。また，団長については，「20歳以上35歳くらいまでの者」が，「25～65歳の方で旅行中の団員を統率していただける方」となり，大学生は実質的には対象外となった。費用に関しても，「団員18万円程度，団長13万円程度（海外旅行障害保険，パスポート取得費など別途）」と明記されるようになった。『広報うしく』第904号，平成17年5月1日発行。

意味で，この事実は注目に値するものであろう。これは，「千羽の鶴」を折ったカナダの小学生の存在があり，「日本的な物事とそのやり方」を学ぼうとするカナダの小学生が存在するということを意味しているからである。

また，「姉妹都市交流写真展」が開催されているが，「カナダ人の目で見た作品」と「日本人の目で見た作品」とが，それぞれの社会の写真家と市民にたいして「訴えかけている」ということである。上記の市民レベルでの交流の大きな芽が存在する状況の中で，このような活動はさらなる自発的な交流に花開く可能性を秘めていると考えられる。

2．市民の理解と反応

牛久市役所は，国際交流や姉妹都市活動に関してアンケートを取り，その結果を公表している。牛久市政策秘書課のホームページに「世界と地域に友情の輪を広げる国際交流の推進」の項目があり，そこではアンケート結果に基づく市民の様々な意見を見ることができる[17]。それらは，主に以下の4点にまとめることができる

1．一般の大人も参加できる方法はないのか。6件
2．交換留学の回数減で子供がガッカリ。1件
3．行政のあり方などの意見交換など，真の国際交流を考えよ。1件
4．姉妹都市の発想は古い。不必要である。5件

以上の中で，「一般の市民も参加できる方法はないのか」という意見もかなり見当たる。既に上に述べたように，ホワイトホースからは，市民レベルでかなりの訪問が見られており，ホームステイを提供することも可能であり，さらに，牛久市民も個人的にもホワイトホースを訪問しホームステイを体験する機会は十分にあるものと考えられる。

---

17 「世界と地域に友情の輪を広げる国際交流の推進」牛久市政策秘書課のホームページ。http://www.city.ushiku.ibaraki.jp/section/seisaku/manzoku/h15ma/15ma_iken16.htm http://www.city.ushiku.ibaraki.jp/section/seisaku/manzoku/h15ma/15ma_iken16.htm

さて，否定的な意見は次の4つであろう。

7　財政が不足している中で，海外の都市に学生を派遣する必要はない。市役所の人に税金の大切さを知ってもらいたい。

8　姉妹都市になっている意味が不明。今後もこの関係を持続する意味もよくわからない。

9　一部の都市とだけ姉妹都市関係を結ぶ発想自体が古い。早く気付いてほしい。やめるべきである。

10　海外よりも国内での他都市の取り組みを勉強して良いところをまねしてみては。海外なんて牛久市では100年早い。国内だってろくに理解していない，民間も勉強すること。

さらに，この「世界と地域に友情の輪を広げる国際交流の推進」の項目の「その他」の箇所にも，以下のような否定的意見が述べられている。

8　行政が行う事ではないと思う。

9　今の時代に必要ですか？

10　行政が力を入れてまでやることだろうか。市民レベルで自主的にやってもいいのでは。

以上の否定的意見のポイントは，姉妹都市交流で学生を派遣する必要はない，ということになろう。果たして，そうだろうか？　姉妹都市関係がなくても，語学留学やホームステイをする方法は，現在ではいくらでもある。しかし，単なるビジネスとしてのホームステイが，姉妹都市関係でのホームステイと，どのように異なっているのかを知れば，「行政が行う事ではない」とか「姉妹都市の発想自体が古いし，今の時代に不必要である」と言い切れるだろうか。姉妹都市関係でのホームステイが，ビジネスとしてのホームステイよりも，遥かに質の高いものであるという事は認識されているのだろうか？[18] また，そのような姉妹都市でホームステイ家族と一

---

[18]　井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係 ── 何を学ぶか ──」，北海学園大学国際会議場，日加修好75周年・日本カナダ学会及び北海道カナダ協会創立25周年記念事業。『めいぷる』北海道カナダ協会会報第71号・創立25周年記念

緒に限られた時間と空間を共にするという事が，牛久の青少年たちにとって，どのような意味を持つのかを知っているのだろうか？　後に述べるように，「異文化カナダという空間」の中で，青少年たちが変化し成長していく様を理解すれば，そしてそれは「姉妹都市という関係があるからこそ出来る事なのだ」ということを理解すれば，上のような疑問も否定的意見も聞かれなくなるのではないだろうか。

III．交流担当部署

1．行政の役割

牛久市には，現在，牛久国際交流協会が存在している[19]。この協会は，姉妹都市関係の青少年派遣や交換留学生の受入れ業務，在外外国人支援，および住民への国際理解促進を行っている。従って，ホワイトホースとの姉妹都市関係において，訪問団の受入，派遣に関しても，公式的にはこの牛久国際交流協会の担当となっている。しかし，協会の会長は牛久市長が務め，所在地は牛久市役所企画部広報広聴課であり，上記に触れた具体的な交流活動に関しては，この企画部広報公聴課が実務の担当に当たっている[20]。

さて，この企画部広報公聴課の姉妹都市関係担当は，課長以下6名で構成されている。現在，牛久市はカナダのホワイトホースの他に，オーストラリアのオレンジ市とも姉妹都市関係にあるので，これらが担当分野となっている[21]。従って，前述の姉妹都市関係に関わる市民団の相互訪問や青

号，北海道カナダ協会，2004年10月31日。

[19] 2003年6月8日，牛久市姉妹都市委員会より名称が変更された。

[20] http://www.ia-ibaraki.or.jp/ja/db/cia/cia017.htm　会長：池邉勝幸，連絡先（牛久市企画部広報広聴課），個人会員158名，団体18，法人36。

[21] オレンジ市との関係については，現在では牛久の高校3校と，オレンジの3校が，それぞれ姉妹校を結んでおり，高校同士間での交流が主になっているとのことである。牛久市役所でのインタビューより。

少年団の相互派遣などの公式の交流活動のみならず，頻繁に訪れる市民レベルでの交流活動にたいしても担当することとなる。去年の10月に移動してきた担当職員の方の話では,「丁度あの時はオーストラリアから来ていた時の中日に移動になった訳で，毎日毎日付いて回って，今日は水族館だ，明日は東京だとか，そんな具合でした。」と言った状況となるようである[22]。

2．青少年団派遣プログラム

担当部署は，上述のように様々なレベルの姉妹都市交流に関わっているが，ここでは毎年派遣する青少年派遣プログラムについて，その特徴を見ておこう。

(1) プログラムについて

プログラムに関しては，「交換青少年派遣生募集要項」を見ると募集から完了までの大体の概要を知ることができる。

交換青少年派遣生募集要項[23]

目　　的

21世紀を担う青少年に国際交流の機会を提供し，視野の広い国際感覚と郷土愛に満ちた人間性を養うために，国際姉妹都市に交換青少年を派遣し，相互理解と友好親善を深めることにより，牛久市の国際化推進を図る。

平成13年7月26日から8月9日まで（15日間）

派 遣 人 員　原則として16名（団長2名，団員14名）

募 集 期 間　平成13年5月1日から5月30日まで

応 募 資 格

団長　市内在住もしくは在勤で，応募時に20歳以上35歳くらいまで

22　牛久市役所でのインタビュー。

23　『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』，牛久市姉妹都市委員会，2001年，28ページ。この要項での条件は，既に述べたように2005年度の要項の条件とは異なっている。

の者　日常英会話が可能で団員の指導能力を有し，帰国後積極的に姉妹都市交流活動に強力できる者。

団員　応募時において，市内に在住する高校生もしくは相当の年齢の者で，国際交流に関心があり，帰国後積極的に姉妹都市交流活動に強力できる者

提　出　先：牛久市姉妹都市委員会事務局（牛久市役所企画部秘書広聴課）

選考試験日：平成13年6月3日（日）

試験内容：筆記試験（団員のみ）英会話，面接，課題レポート（団員のみ）

経費負担：団長（渡航経費の1/2）
　　団員（渡航経費の1/3）

5/1　「広報うしく」に募集記事茎菜
5/1　募集開始
5/30　募集閉切り
6/3　選考試験・派遣生決定
6/28　第1回事前研修会
7/5　第2回事前研修会
7/9　第3回事前研修会
7/12　第4回事前研修会
7/16　第5回事前研修会
7/19　第6回事前研修会
7/21　壮行会開催
7/26　派遣生出発
8/9　派遣生帰国
8/20　帰国報告会開催

(2) プログラムの特徴

内容

普通は，午前中に英語の授業をして午後は課外活動というタイプが多いが，このプログラムの場合は，英語の授業などは一切入ってはいないのが特徴的な点である。午前中は全員市役所に集合して，様々なアクティビティに参加したり，社会見学に行ったりするようである。カナダに行くのだから英語の授業を受けさせるというのが一般的な考え方であるし，事実そのようなプログラムが多いが，体を使った活動に専念させるというのは非常にユニークな点である。このように，屋内での語学研修などが含まれていないということは，教育委員会が関わった事業ではなく，市の事業として行われているという背景もあるようである[24]。いずれにせよ，そのような結果として，後に詳しく見るようにホームステイの家族の人たちや現地の人たちとの接触機会が多くなるという状況を作り出しているようである。

引率者

団長の資格は，「市内在住もしくは在勤で，応募時に20歳以上35歳くらいまでの者。日常英会話が可能で団員の指導能力を有し，帰国後積極的に姉妹都市交流活動に強力できる者。」と規定されている。また，「やっぱり平日なんで，応募してくる人も，あんまり一般の会社員の方っていないですよね。どうしても，2週間も休めませんので。実際，応募者が居なくて，こっちから声をかけて行ってくれないかという年もありましたし。」という事情も過去にはあったようである。従って，大学生が団長となって引率する場合が結構多いとのことである。そして，団員の数が14，5名になったので，6，7名に一人の引率者が必要との判断で，団長は2名になっている。このように団長枠は2名なので，過去には落としたこともあるとのことである[25]。

---

[24] 担当の方は，「まあ，教育委員会なんかでやれば，別なんでしょうけれども。ウチの課でやっているので。教育，教育って，全面に出ない訳で。」と述べている。牛久市役所でのインタビュー。

[25] 牛久市役所でのインタビュー。

この話しを聞いた時には，他では余り例がないので，正直あまりにも大胆な試みだと感じられたが，担当の方の話しでは，「そのうち何人かは，高校生の時に自分で行って，大学生になって，今度団長で行くという子もいますけどね。まあ，そういう子の方が，しっかりしてるんで。」ということであった[26]。大胆な方法ではあるが，リーダー育成という視点から見れば，一つの方法であり，他の所では見られない特徴である。

参加者の資格と選考

参加資格は，「応募時において，市内に在住する高校生もしくは相当の年齢の者で，国際交流に関心があり，帰国後積極的に姉妹都市交流活動に強力できる者」と規定されている。実際は，牛久市内在住の高校生となり，大学生は含まれない。普通は，市外の高校に通う者がほとんどで，牛久市内の高校に通う者は毎年１，２名程度ということである[27]。

選考に関しては，英文の筆記試験とヒヤリングも含めた面接試験がなされる。応募者は，毎年多くても定員より２，３名オーバーするぐらいなので，基本的には全員合格させている。実際，現在担当されている職員の方は，「私が担当してからは，実は一人も落としたことはないんです。20 名以内で収まります。」と述べている。ただ，ホワイトホースのホームステイの関係もあり，「その度にホワイトホースの方へ問い合わせて，人数ちょっと増えるけどいいか，ということで。向こうも何も言わないんで，そういうことでやっています。」とのことである[28]。

公的補助

青少年派遣の事業主体は牛久国際交流協会であり，牛久市からの補助は，この牛久国際交流協会に配付される。そして，団長には「渡航経費の 1/2」，団員には「渡航経費の 1/3」の補助がなされる。

一般的に，行政の支出に対する市民の目は厳しくなってきているが，姉

26　同上。現在では，団長の資格が「25～65 歳」と変更されている。

27　同上。

28　同上。

妹都市関連分野も例外ではない。担当職員の方は次のように述べている。

> 補助金ってのは，ご多分に漏れず見直しっていうことがありまして。まあ，今回は，通ったようですが，先にならなきゃ，分からないですよね。受け入れの時には，スケジュールを刻んで，どうしてもお金はかかっていきますしね。見直しをしていかないと，大変だ。送り出しの方だって，まだ，事業そのものが，市の姿勢として，そんなにお金がかかるとは言え，何千万もかける訳じゃーないので，そんなに大きな議論にはなりませんけど。明治期でもないのに，そんなに洋行のために，わざわざ税金を使って行かせる必要があるのかって，いう話もなくはないです[29]。

団長を含めて16名に対する補助が全額補助であるとすれば，500万円ほどになろうが，全額ではなく，渡航費の1/2，1/3という額である。従って，関連経費を含めても200万円もあれば十分なはずである。この額で，牛久市の青少年の将来に対する考え方や生き方が変わるほどの影響があるとすれば，それでも「わざわざ税金を使って行かせる必要があるのか」と言うことができるのだろうか。

3．プログラムの意義

市民の間には「姉妹都市交流で学生を派遣する必要はない」という否定的意見が存在していることについては，上記の「市民の理解と反応」の箇所で触れた通りである。学生派遣の公的補助に関しても，担当職員の方が述べられているように，「明治期でもないのに，そんなに洋行のために，わざわざ税金を使って行かせる必要があるのかって，いう話もなくはないです。」とのことである。

このような意見は，「交換青少年派遣生募集要項」の「目的」を読んだだ

---

[29] 同上。

けでは，なるほど尤もな意見だと思えるかもしれない。目的の箇所は次のように書かれている。

> 21 世紀を担う青少年に国際交流の機会を提供し，視野の広い国際感覚と郷土愛に満ちた人間性を養うために，国際姉妹都市に交換青少年を派遣し，相互理解と友好親善を深めることにより，牛久市の国際化推進を図る。

「21 世紀を担う青少年に国際交流の機会を提供し... 相互理解と友好親善を深めることにより，牛久市の国際化推進を図る。」ということである。現在では個人でいくらでも海外に行く機会はあるし，「明治期でもないのに，そんなに洋行のために，わざわざ税金を使って行かせる必要があるのか」という意見がでるのは自然なことかも知れない。しかし，この意見が前提としているのは，「個人で行こうが姉妹都市関係で行こうが，同じ事を体験できて，同じ事を学ぶことができる」ということである。この前提が正しいとすれば，「わざわざ税金を使って行かせる必要」はない。しかし，個人で行く場合と姉妹都市の関係で行く場合とは，体験できる範囲も異なれば，質も異なると言えよう。その体験がどのようなものであるかは，後に詳しく触れるが，姉妹都市という関係があるからこそ「体験できる事柄」が存在しているのである。そのことが認識されねばならない。そして，この点に関しては積極的な PR が必要であろう。「牛久市の国際化推進を図る」という抽象的な文言では，到底このプログラムのもたらす結果を伝えることはできない。牛久の青少年が具体的にどのような影響を受けて，どのように変化するのかを，市民に向かってに伝えていき，十分に理解してもらうことが必要なのである。

Ⅳ．相互作用による影響(Ⅰ)――ホワイトホースの訪問団を受入れて

1．姉妹都市担当職員の場合

既に見たように，ホワイトホースとの姉妹都市関係について，青少年訪問団は毎年派遣しているし，受入れもほぼ毎年のごとく行っていると言ってもよい。さらに，市民レベルの訪問の受入れについても窓口となるのは，企画部広報公聴課である。ホワイトホースとの様々な交流を通じて，カナダ人やカナダと接してきた担当職員の方々は，どのようなイメージを抱くようになったのであろうか。

(1)　ホワイトホースの担当部署

カナダ側の姉妹都市担当部署は，普通，民間主体の友好協会などが多いのであるが，ホワイトホースの場合は市役所がその任に当たっているようである。牛久市の担当者が，「ホワイトホースの場合は，町自体が2万なんぼぐらいの所なんで，そういう団体というよりも，市と直接やりとりですね。」と述べているように[30]，自治体のサイズが小さいことと他の地域からあまりにも離れているために，町全体に「コミュニティ意識」が存在しているためかも知れない。

市役所の中でも，姉妹都市担当の窓口は，「レジャーサービス局になってます」とのことである[31]。以前担当していた職員の方の話しでは，「私がやってた時は，人事部長みたいな，ヒューマンリソース・マネジャーが担当者だったんで，その方とずっとやりとりしてたんですけども。」ということである。どうも「組織というよりは，割と個人的にやっている」様子である。その点に関して，この職員の方の話しでは，「そういう担当させる部署がな

30　同上。

31　Whitehorse のホームページによれば，牛久市との青少年相互派遣を担当する部門は，the Parks and Recreation Department になっている。
http://whitehorse.govoffice.com/index.asp?Type＝B_BASIC&SEC＝{A5849227-F6AB-4707-9575-C1E0C22716D9})

いんで，誰かにということだったようです。ところが，そのヒューマンリソース・マネジャーが，どっかへ引っ越しちゃったんですよね。」ということである。「手紙とかのやりとりも，直接市の方の担当者としてましたんで。」とのことではあるが，たまたま担当していたヒューマンリソース・マネジャーが引っ越すと担当が変わるような具合で，日本の市役所とはかなり異なっているとの印象を，この職員の方は持たれているようである[32]。

さらに青少年の派遣や受入といった具体的な件に関しては，市役所ではなく民間の業者や現地の日本人なども関わっているようであるが，全体的に漠然としたイメージのようである。この点に関しては，次ぎのような話であった。

> 旅行社というか，請負をやってる所。つまり，こちらから行く時の，色んな手配をやってくれる所があって，そこの人と連絡取り合ってる，と聞いたんですが。何か，日本語の分かる人がいるんです。市の方で，そこに委託というか，お願いしてやってるんだと思うんだけど。それで，何かあっても，急ぎの時に，じゃ直接そっちとみたいな話で，やったんじゃないかな。基本的には，市役所を通してです。向こうにも日本人が何人か住んでるんで，その人たちが，受け入れの時とか，向こうから派遣してくる時には事前研修なんかで，その人がやってるみたいなんですね[33]。

以上のような事で，ホワイトホース側の担当部署とその役割や業務遂行については，漠然としたイメージしかないようであるが，市役所の「レジャーサービス局」と連絡を取り合って支障なく業務が行われている限り，それ以上のことは必要ないのかも知れない。しかし，上にも述べたように，カナダの場合は，普通，民間の友好協会が姉妹都市活動に関わることが多

32　牛久市役所でのインタビュー。

33　同上。

いので，ホワイトホースのようなケースは非常に珍しいと言えるだろう[34]。

(2)　ホストファミリーが決まらない

ホワイトホースからの訪問団受入れ準備にあたり，カナダ側の担当者との間で具体的なやりとりが行われるが，そのコミュニケーションの仕方にかなり違和感を感じる所があるようである。担当の方は次のように述べている。

> 日程であれなのは... のんびりしているという訳じゃないんでしょうが... 来る人の名簿送ってって頼んでも，なかなか来ないんですよね。近頃はEmailで頼むんですが。以前は，ファックスでやってましたけど。でも電話というのは，なかなか。まあ，こっちとしては，ホストファミリーをなるべく早く決定しないといけないんで，出来るだけ早く情報が欲しいということで，何回も催促のファックスを入れても，なかなか来ないっていうのが，よくありますね。...
>
> 実際に，こちらから行く場合も最後までホストが決まってないみたいなことがありましてね。前日になって，変わりましたみたいなファックスが入ったりとかもありました。こちらは，まあ，派遣するのに親御さんにホストも決まってないって言えないです。その辺は，ちょっと焦る部分もありましたけど。... まあ，第一報では期日は入れませんが，来ない時には何月何日までに返事をくれと言うんですがねー...。

---

[34] 姉妹都市の活動の件に関して，担当の方は次のように述べている。「歓迎の費用なども，やっぱし市の方から出てると思うんですよね。当然，その場に市長さんも来てましたし。友好協会が主催という訳ではなくって。ホワイトホースの場合は，ほとんど市だと思います。友好協会みたいな組織は，あんまりホワイトホースでは聞いた事がないんで。」牛久市役所でのインタビュー。「ホワイトホース市行政サービス委員会議事録」によれば，15,000ドルが牛久の学生を受入るための費用として認められている。

Minutes of the Meeting of the ADMINISTRATIVE SERVICES COMMITTEE Monday, March 7, 2005 Council Chambers, City Hall.

多分，まあ，町が小さいので，こちらから十何人行くとなると，受け入れてくれるホストを探すのも大変なのかなとは，思うんですけど... [35]。

上の表現にもあるように，「こちらから行く場合も最後までホストが決まってないみたいなことがありましてね」とか，「前日になって，変わりましたみたいなファックスが入ったりとかもありました」という状態も，それほど珍しくはないようである。予定表の全てが埋まっているのが，日本の市役所の行事の場合は当たり前のことなので，「ホームステイ先」が決まっていないというのは，「ちょっと」どころか「非常に焦る」ことになるのである。

このような事務処理上の違和感については，他の日本の役場でも程度の差はあれ体験しているようである。それは，日本の場合は担当部署が明確で，しかもその担当部署の職員の間で業務の引継ぎが十分に行われるのが普通であるが，上に触れた所からも伺われるように，日本の役場のような状態にはないということがあるのかも知れない。さらに，ホームステイが最後まで決まらないとか，決まっても変更されるとかに関しては，後に触れるように「自分たちの普段の生活の中で」受け入れるということと，他人を家に迎えるということについて「日本のように一大事だ」とは考えていないことと関係しているように思われる。

(3) ホワイトホース青少年訪問団—その構成と性格について

ホワイトホースから派遣されてくる青少年訪問団に関しても，担当職員の方にとっては，「公的部分と私的部分の考え方の違い」に違和感を持つようなことがあるようである。職員の方は次のように語っている。

人によって，ほんとにバラバラなんですね。ホワイトホースだからか，カナダだからなのか，分かりませんが...。人によって全然バラバ

---

[35] 牛久市役所でのインタビュー。

ラっていうのはですね，私が直接担当するようになって，最初に来たのが，18名ぐらい来たんですよ。その年は，なぜか多くて。それまでは，ほんとに3,4名ぐらいしか来てなかったんですけど。それで，その年に来た子の一人がですね，年齢層がなぜか下がってきて，13才か12才ぐらいの子供なんですね。まあ，これは団長さんから後で聞いた話なんですが...。

こちらから送る場合は，今までですと高校生。向こうからは，中学生が混じっているというようなことがあるんですね。その辺やっぱり，アレですかねー，緩いんですねー。緩いと言えば，去年なんかは，団長さんが小学生でしたか，一緒に連れてきてたんです。団長さんが，ご夫婦で子供連れてなんですよ。牛久の市役所で，あれ申し込まれたら，ちょっと，それは無理で，ゴメンなさいって言いますけどね。それは，止めてください，って話になっちゃうんですけど[36]。

このことから職員の方が問題と感じている点は，年によって人数がバラバラだということと，何よりも青少年団には中学生や時には小学生が混じっており，しかも団長自らが小学生を連れてきているということである。牛久市から派遣する訪問団は高校生という資格であるから，小学生の申し込みがあったら，「それは無理で止めてください」ということになる。

ここでは，自動的に牛久の基準で考えているようであるが，そのような基準が当てはまらない場合は，どうであろうか。つまり，一般的に言って，カナダから日本に青少年を派遣する場合は，自己負担という形式が多いのである。ホワイトホースの場合も，同様に費用が自己負担であるとすれば，子供を連れてくるということについては，特に問題とはならないのではないだろうか。あるいは，既に上に触れたように，かなり「プライベートな側面」が見られるので，「カナダの準州にある人口2万の首都」という特殊な性格も関係しているのかも知れない。

36　同上。

(4) 「想像を越えた」カナダの小学生

ホワイトホースからは，市民訪問団の一員としてではなく，個人的に牛久市を訪れる人も多いことは，既に触れた通りである。そんな場合にも，カナダ人の家族と接して，日本とは異なる一面を知る機会となることもあるのである。担当職員の方は次のように，その時の模様を語ってくれた。

> これは，交流プログラムとは全く関係なく，ホワイトホースに住んでる家族が世界一周とまではいかないけど，色々歩いて回ってる途中で牛久に来るということで，色々対応したことがあるんです。それで，ある所まで私が運転しながら乗せていった時の事なんです。その子供ですね，小学校5年生ぐらいかな。日本は借金がいくらあるのって聞くんですよ。日本の，デットはって，聞くんですよ。いや，カナダはね，借金が多くって教育費に回んないんだよって。まあ，あれは特別なケースだと思いますけどね。ビックリしたと言うか，もう答えようがなかったですよ... [37]。

このような小学生に出会ったとしたら，普通，日本人はビックリするに違いない。初めて出会った大人に対しても物おじせずに対等に話すという態度と，その話しの内容については，共に驚くに値するものである。普通，日本ではこのような小学生に出会うことはないし，また，このような小学生が出現するような教育制度も存在してはいない。文部省の指導による画一的な日本の教育制度の元では，このような小学生は決して現れることはない。

ところが，カナダでは教育は州政府の管轄であるということと，さらに準州であればかなり自由度が高いという事情があるのかも知れない。上述の話しからも，この家族は長期にわたり世界を回るという生き方をしている様子であり，それに見合うような教育をしているものと理解される。こ

---

[37] 同上。

の例は，カナダには日本とは全く対極にある教育を実践することが可能な社会が存在することを示唆している。この「想像を越えたカナダの小学生」との出会いは，担当職員の方にとって，少なくとも日本とカナダとの教育についての違いを考える切っ掛けとなっているのである。

(5)　ホワイトホースのイメージ

担当職員の方の中には，ホワイトホースへの訪問団に随行して行き，現地の空気を肌で感じ取って来た人もいる。受入や派遣を行う立場上，相手の生活している場を訪れ自らの目で観察し，肌で感じて，認識しておくことは，非常に重要なことである。

カナダの気候・風土を肌で感じる

まずは容易に目につく気候・風土の違いを認識して，次のように述べている。

> 私が行ったのは夏だったんで，着いて，夕食を外で食べて，ホテルに帰ろうとしたら，10時だったんですけど，まだ明るい状態で。その辺は，やっぱり北の町でないと，あんなのはないですよねー。サマータイムのせいもあるんでしょうけれど。
>
> バンクーバーから直行で。冬は，マイナス50度になると。普通でも2，30度は行くようですよね。私が行ったのは8月でしたが，朝晩霜が降りてましたから。昼間はTシャツで歩けて，夜は上着を着て，もう息が白いと[38]。

「夜が短く」，しかも夏時間のせいで夜の10時になってもまだ明るい状態は，聞いてはいるものの，やはり実際に体験してみないと分からないという様子が伝わってくる。牛久からの青少年たちが，そのような環境で夏を過ごすということを推測することができる。また，8月でも朝晩には霜が降りる気候を体験してみれば，冬のマイナス50度の世界も想像することが

---

[38] 同上。

できるだろう。そして，そのような環境から真夏の牛久にやってくるホワイトホースの青少年たちがグッタリしてしまうのにも，容易に納得できるということになろう[39]。

なぜか車が止まってくれる!?

日本からカナダを訪れ，街の中で「アレッ!?」と思うのは，道を横断しようとすると，車が自動的に止まってくれることであろう。ホワイトホースを訪れた職員の方が一番驚いたのは，やはり車が止まってくれることであり，「変な話ですが」と言いながら次のように状況を語ってくれた。

> まあ，一番驚いたのは，変な話ですけれど，車が止まってくれるんですよね。渡ろうとすると。ええ，あれはもう日本の感覚で街を歩いていると，とにかく車が来ないのを見計らって渡らないといけないのだけれど... かえって，こっちが戸惑っちゃうぐらい，必ず止まってくれるんですよね。あれは，すごく驚きましたよね。横断歩道だけじゃなくって。まあ，繁華街とかは，また別ですけれども。中心通りって，一本しかないんですね。後は，もう車がそんなに頻繁にいつも走っているような所じゃないんです。そういう所で，もう止まってくれるんですよね。... うーん，必ずしも続いているわけじゃないんで，スッーと行ってくれると，渡りやすいんですけど，こちらの感覚からすれば。やっぱり，歩行者を優先するというのは，もう常識とされているので

---

39 ちなみに，まだホワイトホースを訪れていない職員の方は，筆者がマイナス50度でも部屋の中は快適なはずですからと言うと，次のような話を聞かせてくださった。「あ，そう言えば，この間写真見たら... 何年か前に折り鶴送ってきてくれたことがあるんです。折っている写真とかあるんです。向こうの小学校で。外は真っ白ですね。で，中は半袖着てるから，暖房付けすぎだろうと思ったんですけど。やりすぎじゃないかなって。」少なくとも，北海道に住んで居れば，戸外がマイナス30度でも室内は快適なことは知っており，マイナス50度の世界も想像できるが，本州の冬の生活を基準にすると，やはりマイナス50度での生活を想像することは難しいのかも知れない。

すかねー？　止まられても，最初は，うまく足が出なくって... うーん，別の用で止まってるのかなって思いますからねー。向こうでは，それが普通なんだろうなって。まあ，バンクーバーでは少なかったですけれど。都会に行けば，まあ，違う面もあるんでしょうけれど...[40]。

このような状況に出くわし，「カナダ人は親切だ」とか「マナーが良い」と感じる人も多いが，この職員の方の場合には非常に不思議に思った様である。このように車が止まるのは，交通法規によっている。歩行者が通りの端に立って渡ろうとすると，車は止まらなければならない。歩道の端に立って「車は来ているのかな？」と辺りの様子を見るだけで，車は自動的に止まるのである。日本では考えられないことなので，「一体何のために止まるのだろう」と判断に迷い，立ちすくむことになってしまう。状況が読めないために足が出ないのである。まさに日本的感覚からすれば，この職員の方が言っているように，「スッーと行ってくれると，渡りやすいんですけど」ということになる。ホワイトホースのように交通量が少ない所では，なおさらの事であろう。しかし，車の中のカナダ人のドライバーにすれば，「どうして渡らないの？」と疑問に思うかも知れない。また，「歩行者を優先するというのは，もう常識とされているのですかねー？」と述べられているが，歩道の端に立つ人の姿を見れば，体が自動的に反応してブレーキを踏み，自然に「どうぞ」という心理状態になるのである。いずれにせよ，「人と車の関係」についてカナダの人々はどのように考えているのか，日常生活の中でどのような側面に価値を置いているのかが示されているケースである。

3．ホワイトホース青少年団を受けいれて

(1)　日本の夏を体で知る

夏でも朝夕は肌寒い土地に住むホワイトホースの人たちにとっては，東

---

[40]　牛久市役所でのインタビュー。

京近辺の真夏の気候はまさに想像を絶するものであり異質の世界であろう。担当職員の方は次のように語ってくれた。

> そうですね。子供達の場合は，どうしても夏休みなので，日本の一番暑い時に，あの国から来るんで，相当参っちゃうんですよね。だから，冷夏の時なんていうのは，非常にみんな元気良くって，心配ないんですけど。猛暑の夏に来た子達は，もうグッタリして毎日過ごしてますね[41]。

担当職員の方の話具合から，見ていても可哀想だという様子が伝わってきた。日本人であっても，長年北海道に暮らしていると，真夏の時期に東京に向かって行くには，一大決心が必要である。しかも，ホワイトホースの広大な自然と涼しい夏しか知らない子供達にとっては，真夏のアスファルトとコンクリートの環境という圧縮された空間で過ごすということは，まさに肌感覚でしか得ることのできない異文化体験であろう。もちろん涼しい東京の夏は過ごしやすいが，汗が吹き出てくる東京の夏を経験することにより，理屈ではなく感覚で日本の夏を記憶に刻み込むことになろう。それにより，真夏の日本の報道に接した場合にも，「その状況を体と感覚で把握」するという感受性を身につけることとなろう。

(2) 黙って部屋に入らないで

首都圏東京はもちろんのこと，その近郊でも夏場にエアコンは必要不可欠である。ある夏には，年齢も 12，3 歳の子が混じる 18 名ぐらいの青少年訪問団がやってきてホームステイをした時のことである。当然，寝る時もエアコンをつけたままが当たり前である。そして，あるホームステイの家庭では，子供が寝てしまってから，部屋に入ってエアコンを切るということを行ったのである。その時の様子を，担当職員の方が次のように語ってくれた。

---

41 同上。

12，3，4ぐらいの子供だったんですね。後で団長さんから聞いた話なんですが，あまり家庭的に上手く行っていない子だったようで...。感情的に繊細というかデリケートな子が居て，夜，寝てる時は暑いんで，クーラーかけたままで寝かすんですよね。それで，ホストの人が，クーラーかけたままでは，アレだろうからと言うんで，寝た後に止めてやろうと思って入っていったら，忍び込まれたみたいな形に取られて，精神的にパニックになったみたいな事もありましたね。

その子は，それ以外でも，ちょっと色々あったようで，もともと何か神経質な子だったようで，余計そうなっちゃったかも知れないですね。その年は，団長さん，引率の大人の方は4名来てたんですけど，もう，そちらに電話がよくあって，もう，その団長がもうちょっとだからガンバリなさいと宥めていたようなんですけど[42]。

以上のような状況で，ホストの方が部屋に入ってクーラーを止めることは，日本人であれば全く納得のいく行為である。ホストの方は「風邪をひかせては困る」との思いであり，そのような事は口に出さずとも，恐らく日本人であれば「風邪をひかないようにと止めてくれたんだ。」と解釈するであろう。

ところが，実際起こった事はそうではなく，カナダ人の生徒は，「パニック」になり，「忍び込まれたみたいな形に取られ」たのである。そのような反応は，日本人にとっては理解できない事であるので，「あまり家庭的に上手く行っていない子」で「感情的に繊細というかデリケートな子」であるので，そのような事態になったものとの解釈を行っているのである。

感情的に繊細な子であれば尚更の事であるが，繊細ではなくて極普通であっても，このような事は起こりうる事であると思われる。それは，空間の捕らえ方の違いと，言葉の役割の違いのためであろう。日本人が他人の家に泊まる場合は，「部屋を貸してもらっている」という「気兼ね」がある。

---

[42] 同上。

ところが，この例の場合には，ホームステイ宅で与えられた部屋は，滞在中は「プライバシーに関わる空間」であると解釈されるのである。さらに，言葉による表現がないまま「部屋に入る」という行為が行われたためであろう。「(クーラーをつけたままでは体に悪いので）後で部屋に入って止めるから」と言う「一言」があったとしたら，「いや入らないで。自分で止めるから」と言うかも知れないし，少なくともこのような誤解は生じなかったと考えられる。

(3) 掃除をガマン

ある男子中学生を受け入れたホームステイでは，滞在期間中は掃除を我慢していたという事であった。どうして掃除が出来なかったのか，その時の模様を担当職員の方が話してくれた。

> 部屋掃除したいけど，ガマンしてたって話があるんです。中学生の男の子を受け入れた家庭なんです。専用の部屋を用意して，クロゼットもここだよとか話してあるんですね。ところが綺麗好きの子ではなかったようなんです。シャワーもほとんど浴びないし，脱ぎ散らかして，そのまま置いておく。それが，ちょっと話をしに部屋に入った時なんか，目に付くんですね。自分の子供でしたら，それこそ怒鳴りつけるとか，洗濯しちゃうとか，どっかやるんでしょうけど。やりたいんだけど，ガマンしてたって言ってました[43]。

多分，相手が日本人であれば，「掃除をするから」とか，「掃除機を置いておくから片付けてね」とかの言葉は，自然と口をついて出るはずである。ところが，「掃除をするから」の一言が言い出せずに「我慢をしていた」ということである。恐らく，「英語で言わなければならない」という固定概念に縛られていたのではないだろうか。「掃除をするという『目的達成』のため」よりも，「英語でいかに表現するのかという『形式面』に」捕われてい

---

[43] 同上。

たと考えられる。ホストの「掃除をしなければ」という思いは，言葉では何も表現されていない。「心の中で思ったまま」で，「言葉に出される」ことはない。従って，相手としても，ホストと「空間を共にしながら」も，ホストの「思い」は永遠に伝わることはない。

このケースの場合，問題が大きくならなかったのは，多分に滞在期間が1週間という「限られた期間」であったからだと言えよう。「残り2，3日の辛抱だ。」という気持ちがあり，問題が顕在化しなかったのであろう。滞在期間が，2週間，3週間，あるいは1ヶ月，2ヶ月になった場合には，ちょっとした事が切っ掛けで，「封じ込められていた思い」が爆発してしまうということが起こりうるのである。

このような話を担当の方としていると，「ほんとに言葉が出来る人ばかりじゃないんですから。娘さんが居て，ヤッーと言う英語が喋れる家庭がほとんどなんです。」と述べられた。やはり，「英語でしゃべらナイト」という呪縛に縛られているようである。日本語で十分である。掃除機を持っていって，日本語で「掃除をするから」と言えば，少なくともこちらの意図は伝わるはずである。そこで，相手が「必要無いから」とか，「自分でするから」とかの趣旨の表現するはずである。こうして，「言いたい事を秘めたまま」別れるのではなくて，より進んだ関係が可能になるのではないだろうか。

(4)　やっぱりマック

受入れにあたって気を使うことの一つに「食事」の問題がある。ホストの家庭にも，担当職員の方からは，「いつもと同じ食事を出してくださいって説明をしている」とのことであるが，相手が子供の場合には「好き嫌い」がハッキリとした形で現れ，かなり難しいようである。そのような状況を，担当者の方は次のように語っている。

> お弁当をみんなに配ったんです。その瞬間に，がっかりした顔をしてましたねー。基本的に，日本に来たから和食って思いますけど，食べないですね，子供は。一人だけ，何でもパクパク食う子はいたんで

すけど。ソバ出せば，ソバ食うし。納豆も，ホストのウチで食べてましたから。バーベキュー，お昼に連れてったら，回りに野菜やりますよね。そこにモヤシが乗ってたんですけど。そのまま食べてんですよ，こうやって。モヤシがあって，その上に肉が置いてあって，肉汁とか下に垂れちゃったら大丈夫なのかなって。でも，あの子だけですね。何でもパクパク食うのは。他の子は，やっぱり和食系は，ちょっと手をつけるだけで，あまり食べませんからねー。一応，ホストには，「いつもと同じ食事を出してください」って説明をしているですよねー。折角日本に来ているのに，それも，やっぱり経験ですからねー。

やっぱり，マクドナルドが一番。マクドナルド連れて行くと，もう大喜びで。どうしても，折角，日本に来たんだから，日本食って，ホストの人が考えちゃうんですね。それも，良いのは良いのでしょうけれど。特に，子供はね。大人の人だとね，あんまり美味しくないと思いつつもそれなりに対応できるけど。子供の場合は，それこそ，要らない物は要らないって感じで。遠慮がないっていうのか... 遠慮がないというか，まあ正直というか。顔にすぐ出るし[44]。

このように，例外的に何でも受け入れる子は居るようであるが，なかなか子供達は和食には馴染まないのが一般的なようである。さらに食事の件で気を使った例として，担当者の方は次のようなエピソードを語ってくれた。

ホワイトホースから来た子は，一人，ベジタリアンと書いてあって，こっちも悩んだんです。他の子達はマクドナルドとか好きなんで。取りあえず連れてったら，食べてるんですよ。どこがベジタリアンだってという感じでしたね。だから，親がそう言うけど，子供は隠れて食べてんのかなって，思いましたけど[45]。

---

44 同上。

45 同上。

さて，以上の事から言えることは，「日本食を食べてもらいたい」という受入側の意向と，「やっぱりマック」という食い違いである。

「折角，日本に来たんだから，日本食って，ホストの人が考えちゃうんですね。」と述べられているが，この考え方は良く理解できるし，自然な発想であろう。日本人相手であれば，幕の内弁当や一人前セットで何ら問題は起こらない。しかし，カナダ人の場合には，このような形でだされると，嫌な物には手をつけないので，時には食べる物が無いという事も起こりうる。そして，「好き嫌い」が明白な形でテーブルに残ることになるのである。これでは，「折角，日本食を味わってもらいたい」と思って料理を出した側も，ガッカリである。しかし，その出し方に関して工夫が必要なのではないだろうか。つまり，「一人前」のセットで用意するのではなくて，バイキング形式で用意すればほとんどの問題が解決するのではないだろうか。好きな物もちょっと一口，嫌いな物もちょっと一口。未知の物もちょっと一口という具合に，試してみることも可能となるのである。好き，嫌いは，食べてみ分かるのであって，バイキングのような「選択の自由度が高い形式」が一つの解決策になるものと考えられる。

さらに，「やっぱりマック」という反応は，「やっぱりマック」で良いのではないだろうか。精神安定剤としてのマック，情緒・胃袋安定剤としてのマックの役割は認めない訳にはいかないだろう。ちょうど日本人がカナダを2，3週間旅行して，マックやフレンチ・フライの毎日を過ごし，バンクーバー辺りで「お寿司ー！」と言いながら日本料理店を捜しまわる心理状態に似ているのではないだろうか。精神的に安定していてこそ，未知の料理にチャレンジする気力も生まれてくるのではなかろうか。

(5)「見たい物」と「見せたい物」

ホワイトホースの青少年が牛久滞在中，土日はホームステイのホストと過ごし，それ以外は市役所の担当部署で対応することとなる。滞在中のスケジュールの作成にあたり，カナダ側の「見たい物」と担当者側の「見せたい物」の間のギャップを，いかに埋めるかが問題となって現れてくるのである。担当者の方は，次のように述べている。

土日以外は，基本的には役所なんです。夕方のお別れパーティとかを除けば，基本的には役所なんです。こちらの生徒たちは，昼間は学校に行ってる。お父さん，お母さんは，働きにいく。だから，日中，帰るまでについては，役所が見なければいけないっという考え方ですよね。向こうのホワイトホースでは，フリスビーとかもやってましたけど。しかし，いざ，公園に行って遊びましょうっていうのも，ちょっと出来ないですしねー。じゃ，今日は大仏さんを見学に行きますとか。一日，二日は，まあ学校訪問とかもありますけど。後は，どうしましょう，ということにならないように，スケジュールがタイトになり過ぎるということもありますが，かと言って空けておくと，怒られちゃうしね。まあ，終わった後は，ホストの方にアンケートも取るんですが，スケジュールがタイトで，子供がちょっと疲れてる，みたいな意見もあるんですけどね。ただ，家に誰もいなくなるような家庭が多いですから，平日の昼間は。やっぱり，こっちで，その分は対応しないと，と言う部分もありますしね。

折角，日本に来たんだという部分も，やっぱりありますから。そうすると，やっぱり，日本のお寺や神社など，そういうのは向こうの子に興味がないのもあって。ほんとにもう，その辺の兼ね合いが。かと言って，向こうの子に合わせて，マクドナルド行って，ディズニーランドに行って，ばっかりでは，何のために日本に来たのか分からない部分もありますし。兼ね合いが非常に難しい所ですね[46]。

見せたい日本の文化，見てもらいたい日本の文化というと，どうしても「神社仏閣」や「能や歌舞伎」などの「固定概念」で考えてしまうようである。しかし，カナダの青少年にとっては興味のわく対象ではないという現実に出会うことになる。担当者の方は，その模様を次のように述べている。

---

[46] 同上。

最初のころは，日光の東照宮に連れて行ったんですよ。やっぱり国宝ですからね。でも，向こうの子達には興味ないみたいで。ほんと，あんまり興味持たないですね。それで，結構駐車場から歩くじゃないですか。それも結構疲れるみたいで。だから，もう明くる年は，面倒くさいから江戸村にしちゃったんです。

やっぱり，確かに今言ったように建物，寺社仏閣とか，そう言うものって，一目見ればいいやってとこがあるんで。そこで時間とっても，しょうがない。バスの中から見ればイイやって部分も，向こうの子にしてみれば，やっぱりあると思うんで... [47]。

なかなか「見せたい物」と「見たい物」を一致させるのは困難な作業であるようである。担当者の側とすれば，多少とも社会見学的な見地から，例えば都庁の見学案をカナダ側に示すと，「建物なんか見たくない」って撥ねられたこともあるとの話であった[48]。

そんな中，ショッピングもできれば伝統的な日本もあるという理由で，まさに「浅草辺りが一石二鳥」であり，結構，人気がある場所となっているようである。さらに「百円ショップが好評だった」そうだが，手ごろな「土産物」を見つけることができる[49]。

上に述べられているように，「向こうの子に合わせて，マクドナルド行って，ディズニーランドに行って，ばっかりでは，何のために日本に来たのか分からない部分もありますし。」という見方も尤もなことである。しかし，カナダの子供たちの視点からは，ワクワクするような体験であろう。カナダで，本場アメリカのディズニーランドに行った経験のある子供達は少ないので，日本のディズニーランドは友達に自慢したくなるような経験に違いない。だから，多少費用はかかるものの，距離的にも遠くはないし，自

47　同上。

48　同上。

49　同上。

慢話をお土産に持たせることができるのではないだろうか。

要は伝統的な日本に囚われずに考えることが必要なのではないだろうか。デパートの地下の食品コーナーや，秋葉原の電気街，それに銀座でのウインドーショッピングなど，まさに日本の現代文化でもある。そして，それらはホワイトホースでは決して経験できないことであるし，カナダの大都会でも経験できないことであるので，ワクワクするような思い出となるのではないだろうか。

V．相互作用による影響(II) ── 牛久青少年訪問団の場合

牛久市は，上野駅から常磐線で約1時間の所にある人口7万余り市である。農業が主だったものの宅地化が進んでいる。東京から50キロの圏内にあり，東京への通勤客も多い。小学校4，中学校4，県立高校1，私立高校1，通信制高校1であり，ホワイトホース青少年訪問団に参加する高校生たちは，そのほとんどが市外の高校に通学している生徒である。このような環境で育った生徒たちが，カナダに接し，ホワイトホースでホームステイをして，何を見て，何を感じ，何を考えたのだろうか。ここでは，2週間の異文化生活がどのような影響を生徒たちに与えたのかについて見て行こう。

1．初めてのカナダ

(1) 不安と向き合って

生徒たちの多くにとっては，初めての海外であり，初めてのホームステイであり，初めてのカナダという訳で，全てが初めての経験であり不安がイッパイの旅立ちであった。生徒たちは，そんな気持ちを異口同音に次ぎのように述べている。

> 今回の旅は私にとって初めての海外だったのでとても不安だったし，何より英語が通じるかが一番の心配だった[50]。

---

[50] 『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，9ページ。

一人でのホームステイ。初めはこの不安から始まった。言葉が通じなかったらどうしよう。...[51]

何もかもが初めてで，少し不安を抱えながらの出発。ホワイトホースに到着するまでは，緊張しっぱなしでした。...[52]

ところが，生徒の中には以前牛久の自宅にホームステイさせた子供に再会できるという女生徒もおり，その場合には早く会いたいという思いの方が強かったようである。

...15歳のシャーレンは，今年の6月，私の家に交換留学生としてやってきていた。そのせいか，今回のホームステイ，私の心の中は不安より彼女に会える楽しみが占領していた[53]。

このような生徒は例外的であり，他の生徒たちは一様に不安な気持ちで一杯であった。そしてホワイトホースに到着する時には，ある生徒が述べているように「あっ，ホームステイだああっ。大変だああっ。」というのが，ほぼみんなに共通した思いだと言えるだろう[54]。

しかし，このような不安を抱えた牛久の高校生たちを待ち構えていたのは，カナダ的とも言うべき出迎えであった。その時の模様を，ある男子生徒は次ぎのように語っている。

ホワイトホースに着いたあの日，到着ロビーに着いたあの瞬間，僕

51　同上，10ページ。

52　『1998年度牛久市交換青少年事業報告書』，牛久市姉妹都市委員会，1998年，19ページ。

53　同上，18ページ。

54　同上，23ページ。

は今も覚えている。僕を迎えに来てくれたのはホストのお父さんのJimとその子供，双子のBailyとTylerだった。双子は横長の大きな紙を持っていて，そこには「WELCOME TO WHITEHORSE KOJI」と大きく書かれていた。それを見た僕は，うれしくて涙をこらえるのに精一杯でBailyやTylerが話しかけてくるのに「Thank you」や「I'm glad」としか言えなかった[55]。

小さな空港であるから，よく目立ったことだろう。それまでの不安は一気に飛んでいってしまい，感動と親近感がそれにとって変わるのである。

もちろん，みんながみんな，このようにいく訳ではない。空港でホストファミリーの出迎えを受けたものの，まだまだ簡単にはリラックスできない生徒もいる。その時の様子を，生徒たちは次のように述べている。

ホストファミリーとどのような話しをしようか不安に感じていました。ホワイトホースへ向かう飛行機の中では緊張が高まってきました。ホストファミリーのJackson家に着いた途端，不安も緊張も吹き飛びました。家に招き入れてもらうとすぐHost-sisterのCarryがセーラームーンのカードを出して楽しそうに説明してくれたからです[56]。

ホストの部屋に行くとプレイステーションとセーラームーンのポスター。家のボートのエンジンはホンダ製。日本の企業ってけっこうすごいんだと思った[57]。

何と，ホストの家に入った瞬間，あの誰でもよく知っているセーラームーンが待っていたのである。ホストの家の女の子が，セーラームーンのカー

---

55 同上，15ページ。

56 『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，18ページ。

57 『1998年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，23ページ。

ドを手に持って話しかけてきたのである。不安が吹き飛んで一気にホッとした様子が想像される。セーラームーンだけではなく，ソニーのプレイステーションもホンダ製のエンジンも目にとまる。こうして，ホストに対して親近感を覚え，同時に心理的余裕も生まれてくるようである。

また，ホストとの出会いを，「ホストはきれいでやさしそうな人。家は大きく，中はすごくきれい。夜の食事はピザハットですごく大きいピザ。goodテイスト。」と述べている生徒もいる[58]。

このようにしてホワイトホースでのホームステイが始まるが，最初の「1，2日は言っていることが分からなかったり，通じなかったりで本当に泣きだしそうになった日」が続くようである。また，「最初は，日常の簡単な会話にもとまどってしまうことが多かったが，ジェスチャーを交えて懸命のボディランゲージを何とか理解してもらえた時の感激は，冷や汗とともに忘れることができない」という体験をするのである。近頃の日本では，このような体験をする場所も機会もなくなっているが，非常に重要なことである。そして，自ら「泣きだしそう」な気持ちや「冷や汗」を乗り越えて，「だんだん慣れてきて，ずっとこの家族と一緒にいたいと思う」ようになっていくのである[59]。まさに，それが「経験」の重みということであろう。

(2)　想像を超えた自然

牛久市には田畑もあるし自然もすぐ傍にあるが，牛久市の生徒たちが唖然としたのは，ホワイトホースの桁違いの自然である。同じ自然ではあっても，あまりにも規模が異なるため，今までの「自然」の概念には当てはまらないのである。ただただ圧倒され茫然と立ちすくんでしまう。その様子を，生徒たちは次のように表現している。

> 目の前に広がる大自然のパノラマ。見る物すべてが日本とスケールが違い，その大きさに体の中を電流が流れたように身ぶるいをし，そ

58　同上。

59　『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，8ページ，19ページ。

の場に立ちすくんで見入ってしまった[60]。

ホワイトホースの空港を出た瞬間，頭の中は〝広い！　寒い！〟の言葉で埋め尽くされた。日本での忙しい毎日やあせり，悩み，不安がぶあっと吹っ飛んでしまったのはこのときだったのだろうか，ただただ目の前に広がる山と空に感激した[61]。

Whitehorse は本当に自然が多くて，どこを見ても山だらけという感じだった。そしてとても美しかった。少しは予想していたが，それ以上の量で驚いた。... [62]

初めての海外だったので，見るもの何もかもが新鮮だった。特にすばらしかったのは，カナダの雄大な自然だった。空はとても青く，いろんな所にはえている木や草や花がとてもきれいだった。山の上には白い氷河があったり，日本では見られないものをたくさん見られた。... [63]

想像を越えたものを理解するのは難しいことであるが，日本列島という広がりを頭に描いて，その中に存在するのは人口 2 万人程度の町が一つという空間を想像していただきたい。ユーコン準州の面積は，日本の約 1.3 倍である。その広大な土地に住む人口は，ユーコン全体で 28,000 余りであり，その内の約 2 万人近くがホワイトホースに住んでいる。つまり，ホワイトホースの空間の感覚は，日本よりも大きな空間の中に，北海道の芦別市が一つ存在するといった感じで，まさに自然ばっかりと言える[64]。ホワイト

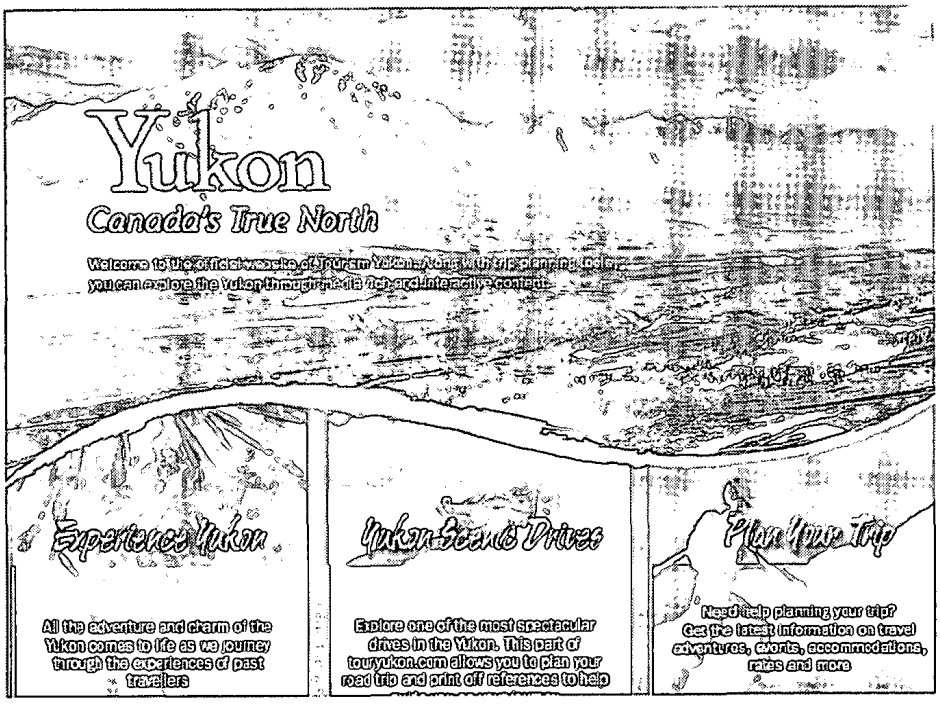
60　同上，19 ページ。

61　『1998 年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，18 ページ。

62　同上，13 ページ。

63　同上，8 ページ。

64　国土交通省国土地理院，http://www.gsi.go.jp/KOKUJYOHO/



桁違いの自然（ユーコン観光局のホームページより）

ホースの空間は，ちょうどそのような感じである。同じ自然と言う言葉であっても，まさに見なれた日本の田園風景や箱庭的な空間とは異質の自然が存在することを認識するのである。そして，このような今までには経験したことのない「圧倒的」な自然の他に，「夜10時でも明るくて，日没は12時」という「短い夜」も加わり，まさに異質の空間に入り込んでの経験をすることになるのである[65]。

(3)　ホームステイの環境に驚く

ホワイトホースのホームステイの住環境も，日本の住環境とは規模と内容において余りにも異なっており，全てが驚きの連続であった。まずは，ホストの家に連れて行かれるが，家が建っているのは隣の家が見えないような自然の中であり，とても日本では想像できないような環境の中に建っ

MENCHO/200410/ichiran.htm。2001年の人口：ユーコンが28,674人，ホワイトホースが19,058人。2001 Community Profiles, Statistics Canada, http://www.statcan.ca/english/Pgdb/)

65　『1998年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，23-24ページ。

ているのを見て驚きの声をあげるのである。

隣の家が見えない

家はDowntownから20分以上かかるところで，隣の家も見えなくて裏にはYukon川が流れていて周りは林に囲まれていました。とても静かで，そうの環境の中で住めることをとてもうらやましく思いました[66]。

私を受け入れてくれたSchmidt家はダウンタウンから車で20分ほどの森（？）の中に住んでいる。カナダの自然を求めてドイツから移民してきたというだけあって，かなりアウトドア派の一家だった。だから最初は生活の違いにとまどったり不安になったりもした。でも，一緒に生活していくうちに居心地が良くなり，離れたくなくなった[67]。

そして外観はそれほど大きく見えない家でも，いざ中に足を踏み入れると，予想外の大きさに驚くことになるのである。

ホストの家は外から見るとミニチュアみたいに小さく可愛らしく見えるのに，中に入ってみると想像していたより広くて驚いた。それは構造が半地下になっていた事だからだろう。そして庭もとても広く2匹の犬も走り回れ，ジャグジーというプールもある[68]。

さらに，ホームステイによっては，「好きな部屋が選べる」という所もあり，予想外の事態に驚くことになる。あるいは自分の部屋に案内された時，目の前には日本とはあまりに異なる空間があり，驚きの声をあげるのである。

66　同上，12ページ。

67　同上，16ページ。

68　『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，13ページ。

リンダさんの家はとてもきれいで，大きな家でした。「どの部屋がいい？」ときかれて，１人で１部屋使っていいと聞いてとても驚きました[69]。

家に着き，案内された私の部屋はまるでお姫さまベッド。私はもう二度，あんな素敵な部屋で寝ることはないであろう[70]。

確かに外から見ると小さな家でも，中に入ってみると，その大きさに驚いてしまう。１階の下がそのまま全部地下になっているので，平屋であっても実質的な広さはその倍になるからである。従って，外から見ても大きく見える家は，内部は驚くほど大きいということになる。そして子供が独立している場合などには，当然，「どの部屋がいい？」ということになろう。インテリアに凝り部屋を飾るというのは珍しくないので，「私の部屋はまるでお姫さまベッド」というように感じても無理は無い。

そして，このような環境でホームステイの日々を過ごすことになるが，ある女生徒はその感想を次のように述べている。

Clayton家で生活していて，あまりの静けさに驚いた。電車や踏切りの音はもちろんなく，車の騒音もほとんどない。私の目覚まし時計の時を刻む音が一番うるさかったぐらいだ[71]。

「私の目覚まし時計の時を刻む音が一番うるさかったぐらいだ」と，その静寂さに驚きの声をあげている。「電車や踏切りの音はもちろんなく，車の騒音もほとんどない。」と述べているが，例え電車が通り，車が通ったとしても，多分「日本で経験しているような事」にはならないはずである。そ

---

69 『1998年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，11ページ。

70 『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，6ページ。

71 同上。

れは，建物の構造上の違いと窓も二重窓・三重窓であるから，外の音はそんなに聞こえないのが普通なのである。まして，隣の家が見えない所とか，森の中のような場所であれば，日本では経験したことのないような静寂さが回りを囲むのである。

ここでは生徒たちは，日本とは余りにも異なるホワイトホースの住空間に，ただただ驚いているだけである。そして，それ以上の事は述べてはいない。しかし，実際そのような空間が存在することを自分自身の体で認識することは，本人たち自身は気がついてはいないが，が「生活の質」ということを考える契機にもなるであろうし，非常に重要な体験であると考えられる。

2．ホストファミリーと共に

(1) アクティビティーで超える言葉の壁

牛久の高校生たちは，異口同音に，「カナダにいた時間は，日本での１日ぐらいの長さにしか思えないほどの速さで過ぎていきました。」と述べている[72]。「２週間という時間をこんなに短く感じたのは初めてだ。でも，その短い時間の中で，本当にいろんなことを経験した。すっかりカナダという国に魅せられていた。美しい自然，町並み，人々。今はなつかしくてたまらない。」と言う生徒もいる[73]。

つまり，ホームステイの大半は，生まれて初めての様々なアクティビティと取り組む事により，身も心も今まで体験したことのないような充足感を味わうことになり，同時に言葉の壁を超えていくのである。

毎日が楽しいチャレンジ

ホワイトホースでは，日本では経験できないようなアウトドア・アクティビティーを毎日経験することになる。その模様を男女の別を問わず生徒たちは次のように述べている。

---

72 『1998 年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，22 ページ，12 ページ。

73 同上，16 ページ。

Homestayは...毎日暇な時間がないくらい遊んだ。例えば，乗馬，サイクリング，魚つり，水泳，フットボールやフリスビー，カヌー，キャンプ，ドライブ，バーベキュー，モーターボート，買い物，ラズベリーをとったり，他にもたくさんのことをした。この中のほとんどが，初体験なものが多かった。そしてとても楽しかった。やらなくては分からない楽しさがあった。HomestayでWhitehorseにいたときは，毎日が楽しくて，とても充実していた[74]。

Perryさんは，私がカナダで一番楽しみにしていた，カヌーに連れていってくれました。自家用車で川の上流に行き，カヌーで下っていきました。下った川はとてもきれいで，一言では表現できないほど素晴らしい川でした。川の水は澄んでいて，底まで見えそうなくらいでした[75]。

ホームステイ中は，ある山の頂上へ行ったり，ビーチへ行ったり，can-canのショーを見に行ったり，カヌーをしたり，釣りをしたり，乗馬をしたり，キャンプをしたり……と，とにかく色々な体験をした。本当に楽しかった[76]。

私はカナダで過ごした2週間の想い出は，一生忘れることができないと思います。...

ホワイトホースは周りを山に囲まれていて，本当に自然の中にある街という感じで，その自然の中でハイキング，カヌー，乗馬，ウォーターボードなど，日本では体験できないようなことをたくさんしました。

74　同上，13ページ。

75　同上，20ページ。

76　『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，9ページ。

ホワイトホースにいる間,私は一度も暇なことがありませんでした。毎日がとても充実していて楽しかったです[77]。

このように，今までにした事もない様々な事にチャレンジしている。そして，余りにも楽しく没頭したものだから，「2週間が1日ぐらいの長さ」にしか思えないほどの速さで過ぎ去ってしまったと表現している生徒もいる。日本で同じ事をする機会があったとしても，多分，こんな風に時も忘れるほどの体験は不可能であったことだろう。初めての事に，体当たりできたのは，まさにホワイトホースの環境であったから，可能であったと言えるだろう。それは，ある男子生徒の次ぎのような観察にはっきりと現れている。

…ここに住んでいる人はみんなスポーツがうまい。Peter は私の弟と同い年だというのに,ついていくのがやっとだった。特にアイススケートでは北国育ちを感じさせるほどうまかった。また，カナダ人は老若男女を問わずスポーツが大好き。だから自転車でも一人2台持っていたし，ボートを持っている人もいた。日本人の場合は好きでも恥ずかしくてできないと言ってしまいがちだが，ここでは個性がすべてはっきりしていた[78]。

ここに,「日本人の場合は好きでも恥ずかしくてできないと言ってしまいがちだが，ここでは個性がすべてはっきりしていた。」とハッキリと表現されている。だから，日本であれば周囲を気にしてしまって,「恥ずかしくてできない」のである。ところが，ホワイトホースでは「個性がすべてはっきりしており」，他人と違っていて当然であり，自分のやり方でやって当然であり，周囲を気にする必要はないからである。

---

77 同上，16ページ。

78 『1998年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，14ページ。

勿論，こうしたアクティビティは一人で出来るものもあるが，そのほとんどはホストファミリーに教わったり，一緒に行ったりするものである。そして，その過程で徐々に言葉の壁がなくなってしまうのである。その模様は，生徒たちの次のような言葉にも現れている。

> ... ホームステイ中には，プールに行ったり，馬に乗ったり，山にのぼったり，犬小屋を作ったり，公園に行ってアイスクリームを食べたりといろんなことをさせてもらい，言葉が通じなくてもとても楽しかったです[79]。

> 最初の夕食の時に，何を話していいかわからず，あまり話せなかったけど，一緒にラズベリーつみや，乗馬，他のホストの家へ遊びに行き，そこでビーバーを見たり，カヌーをしたりするうちに，だんだんと話せるようになって，とてもうれしかったです[80]。

> 最初の頃は言葉が出てこなくて意味の分からないジェスチャーばかりでしたが，日が経つにつれて英会話らしくなってきてとてもうれしかったです[81]。

初めてのワクワクするような体験に，生徒たちは時間を忘れて没頭し，そんな姿を見て喜ぶカナダのホストファミリーを想像することができる。そこにはお互いの心理的距離が縮まり親近感が生まれてくるのである。こうして，日常生活の分野においても，生徒たちはホストファミリーと関わって積極的に自己を表現していくようになるようである。

79　同上，10ページ。

80　同上，11ページ。

81　『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，20ページ。

(2) 家族とともに

現在の日本で高校生ともなれば，普通の日はもちろんのこと夏休みであっても，恐らく家族と一緒に過ごすのは稀であり，色んな事を一緒にすることもないのが普通ではないだろうか。しかし，ホワイトホースでの滞在中，かなりの時間をホストファミリーの家族と一緒に過ごしているのである。

ホワイトホースでは，家でも遊ぶ道具がイッパイあり，家族の誰かと常に遊んでいたようであり，その様子をある生徒は次のように述べている。

> ホストファミリーはホームステイ中，僕を飽きさせることなく楽しませてくれた。特に16歳のDarren，そして10歳のBailyとTylerは僕を休ませることなく，サッカー，バスケットボール，トランポリンなどに誘ってくれ，僕が退屈しないように一生懸命になってくれた。おかげで時間がたつのを忘れるくらい充実した10日間を過ごすことができた[82]。

家族と一緒に

---

82 『1998年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，15ページ。

…家には4人のりのトランポリンがあって，サリーとダニーと私と堀切さんとで一緒にのって遊んだり，バドミントンをやったりしてとても楽しかった[83]。

また，家の中では，ビデオやテレビを見て過ごしている。その模様を，生徒たちは次のように語っている。

家では，Tyler・Baily と…ビデオで映画を観たりして夜の11時過ぎまで遊んだ[84]。

又，一緒にテレビを見たり，映画をみたりして夜を楽しく過ごしました。Trinity も麻衣子さんもとても crazy だったので10日間本当に楽しく過ごせました[85]。

ホストファミリーと一日中過ごす日は，映画（セラームーン）やコメディ番組を観たり，ジャッキーの卒業アルバムを観たりしていました[86]。

17歳の Moritz はキャンプに出かけてしまったので，12歳の Katja と10歳の Yule がいつも一緒にいてくれた。どうやら私を16歳とは思っていなかったようで(笑)，本当に対等に接してくれて，それも嬉しかった。2人は私が教えたばばぬきと「黒ひげ危機一髪」が大好きで，一日中やっていた日もあった[87]。

83　同上，8ページ。

84　『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，14ページ。

85　同上，17ページ。

86　同上。

87　『1998年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，16ページ。

さらに，家族の者と一緒に散歩に行ったり，Tim Hortons にコーヒーを飲みに出かけたりしている。その時の模様は，次ぎのように述べられている。

夕飯の後に家の周りの山に散歩にいったりしてその山がとてもきれいで，ここで育った Trinity が羨ましくなりました[88]。

Debbie はコーヒーが好きで，ステイ中 4 回，夜に Tim Hortons というドーナッツ屋にコーヒーを飲みに行きました[89]。

夕食後は毎晩，Carry，Aline，Tod そして Graham の 5 人でコーヒーを飲みに出かけました。Rick の説明によるとホワイトホースでは若者はすることがないのでコーヒーを飲みに行くという日課が最も興味深いものでした。若者たちの会話は冗談が多く，笑いが絶えないのですが，なかなか話が飲み込めないことが多く困りましたが，そんなときは Aline が説明してくれました[90]。

こんな風に，ホストの家族の誰かと一緒に，実に様々な事をしているのである。しかし，こんな事は日本で起こるだろうか？　日本では，家族の誰かと散歩することはあるだろうか？　母親とドーナツ屋さんにコーヒーを飲みに行ったことはあるだろうか？　日本では家族一緒にビデオを見たり映画を見たりして過ごすことはあるだろうか？　もっとも，こんな事を日本でやろうとすれば，高校生ともなれば，友達と出歩くことはあっても，多分断ってしまうのではないだろうか。両親にしても，母親は『冬のソナタ』を独りで見て，父親は別のビデオを別室で見ると言った状況が普通で

---

88 『2001 年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，17 ページ。

89 『1998 年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，17 ページ。

90 『2001 年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，18 ページ。

はなかろうか。

牛久の高校生たちの言葉の中には，「家族」ということについて真正面から取り上げることはないが，カナダの家族とともに過ごす様子を次のように述べている。そこから，家族をどのように考えているのかが見て取れる。

> シャーレンの家族は本当に素敵だった。優しいままといつも陽気なパパ，朝起きてドアを開けるといつも待ちかまえてくれる甘えん坊な3匹の犬，そして元気なシャーレン。すっかり居心地がよくなってしまったのは彼らの人柄のせいかなあと思う。彼らと共に生活した日々は本当に素晴らしかった。近くに住んでいるお兄ちゃんも来てのみんなでの食事も，おばあちゃんちでのひとときも……どれをとっても一番の思い出で一言では書くことができないし，語り始めればきりがない。とにかく私，毎日笑い転げていた[91]。

> ホストファミリーであるDadとMamはとても親切で，そしておもしろい人でした。何度二人の冗談にひっかかったことか。もっと自分の英語力があったら笑い飛ばすことができたのになと思いました。MarkとMathewのお兄ちゃん達は，妹のJackieととても仲が良く，私も混じって一緒にファミコンをしたりして遊んでくれました。...私はこの温かい家族と一緒に毎日を楽しく過ごしました。食べ物もとてもおいしくて，ごはんを出してくれたり，〝私の為に〟とつくってくれたピザを出してくれたときには，とてもうれしかったです。... お別れのときはとてもつらかったけど，「今度は私が会いに行くわね。」とJackieが言ってくれて，「あなたは私の子供みたいなものだから，いなくなるとさびしいわ。」とMamが言ってくれたときはたまらなくうれしかった。
>
> カナダはとても良いところでした。大自然の中で，両親の愛情をたっ

---

91 『1998年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，18ページ。

ぷりともらって育っていく子供たちを見て，とてもうらやましく思いました[92]。

今日は別れの日。この日がずっと来ないことを願っていたが，来てしまった。「私は帰りたくない」と言ったら，ホストファミリーのみんなが「永年の別れじゃないよ。来年の夏，来るだろう。私達は家族だから大丈夫」って言ってくれた。でも，私達みんな Whitehorse から別れたくなくて，なかなか飛行機に乗れなかった。私はその時，Whitehorse の人，物，すべてに「ありがとう」と叫びたい気持ちだった。

今私は，本当に感謝している。この旅のおかげで，私は人のやさしさが一番よく分かった。... [93]

まるで映画の中のような温かい家族の様子が伝わってくる。牛久の高校生たちは，ここでは日本の家族と意識して比べている訳ではない。しかし，言葉にしなくとも「何かが異なっている」ということは感じていたはずである。日本では経験することが稀になった，この「家族で一緒に何かをする」という感覚を，久々にカナダで味わったのではないだろうか。この「家族で一緒に何かをする」という感覚，家族が結ばれているという安堵感と心地よさが，後に詳しく述べるように「日本に帰りたくない」という思いと関連しているのである。

(3) 週末・余暇は家族一緒に

夏の間の休暇や週末の過ごし方は，日本とはかなり異なっている。日本では，高校生ともなれば，おそらく家族が一緒に過ごすということは極めて稀なことであろう。ところが，家族みんなで湖の畔にあるコテッジに行ったり，キャンプに出かけたりするのがカナダでは一般的である。牛久の若者たちは，週末や休みの日をカナダ人の家族と一緒に過ごすことになるの

---

92 同上，19 ページ。

93 同上，13 ページ。

である。

水辺のコテッジで過ごす

牛久の生徒たちは，週末をホストファミリーと一緒に湖畔で過ごすことになったが，カナダ的過ごし方は初めてのことで，その模様を各々次のように述べている。

そのファミリーと過ごした10日間を何と表現したらいいのか，僕には分からない。「無我夢中でその瞬間を楽しんでいた」ただそれだけだった。最初の土日，ファミリーは僕を湖のそばにあるキャビンに連れていってくれた。そこで水上スキーに挑戦してみたり，ホストファーザーのJimにボートに乗せてもらったり，キャンプファイアーをしたりして過ごした[94]。

今日は湖近くのホストのsecond houseに泊まりがけで行くことになった。湖の水はとても冷たく，泳ぐことなどできなかったが，カヌーをしたり，浜でサッカーをしたりして楽しんだ[95]。

旅立ちの前日，みんなで湖近くのキャビンへ行った。そこにはたくさん親戚も遊びに来ていて，みんなで水上スキーをやったり泳いだり，サウナに入ったり……一日中湖の砂浜で遊んだ。私はシャーレンとその小さないとこと泳いだり，サウナで笑い転げまくったり，パパの水上スキーを間近で見たり，転倒した人をみんなで笑ったり，それはもう大盛り上がりだった。夕食をみんなで外のウッドデッキで食べたとき，「ホワイトホースはどうだった？」と聞かれ，「アイ　ラブ　ホワイトホース」と心から答えた。みんなとてもうれしそうだった。ママが「彼女はまた来るのよ！」としきりに言ってくれていて，別れをじ

---

94 『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，14ページ。

95 『1998年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，24ページ。

わじわ感じ始めたのと，ママたちの優しさで泣きそうになるのを必死でこらえるのがつらかった[96]。

週末を湖のコテージで過ごすと聞いただけで，うらやましくなるのではないだろうか。しかも，水上スキー，カヌー，ボート，サウナ，キャンプファイアーなどなど，大自然の中で楽しむものがイッパイあるのだから，ちょっと日本では考えられないことである。カナダ的余暇の過ごし方がよく現れている。さらに重要な事は，家族が週末を一緒に過ごすということ，そして時には親戚や友人も一緒に過ごすということである。上の生徒は自分自身では気付いてはいないが，そのような状況の中で，他の人たちとどのように関わっていくのかを学んでいるのである。

もちろん週末には必ずコテージやキャンプに行くという訳ではなく，時には家で過ごすこともある。そんな時には，家族でビデオを見てすごすことも多い。ある女生徒は，「週末はレンタルビデオ屋さんでビデオを借りてきて，みんなで見ながらポテトチップスを食べたことが，ホストと過ごした想い出の一つになっています。」と述べている[97]。このような時にも，やはり家族一緒に見ることが一般的であり，「家族の時間」なのである。この女生徒は，明白には意識してはいないが，日本とは「何かが違う」と感じたハズである。日本では，各自が「自分の好きなビデオ」を別々の部屋で見るということが，恐らく普通の家庭で行われていることであろう。

キャンプ，ハイキング，山登り

湖の畔のコテージで休暇を過ごすだけではなく，もっと自然の中に入っていって過ごすことも多い。ある生徒が述べているように，「見渡す限りの山と緑に囲まれながらのキャンプは最高!!」である[98]。キャンプでは，「木の枝の先にソーセージをつけて焼いたホットドック」を食べ，夜には「マ

---

96 同上，18ページ。

97 『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，8ページ。

98 『1998年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，25ページ。

シュマロを木の枝にさして焼いて」食べたり，みんなで話していたら朝の3時になったり，「一生忘れられない体験」をしている[99]。

大自然の中のキャンプは，規模も快適さも日本でのキャンプとは異なってはいるが，キャンプはキャンプであり，予想がつかないといった類いのものではない。しかし，「ハイキング」とか「山登り」となると，牛久の高校生たちの想像を越えるものだったようだ。女生徒たちは次のように語っている。

> そしてハイキングの日。ピクニックみたいなものだと思っていたけど，それはまったく違った。何時間も山の中を歩き，正直言って私は歩くことを楽しむなんていう余裕はまったくなくて，ただつらいと思って居た。... ハイキングは，岩山をのぼったり怖い体験もしたけれど野生の鹿やリスが見れたり，いい体験もたくさんした[100]。

> 私は昨年うちに来た，Peter の家に行けるということもあって，とても楽しみだった。そして，ハイキングに行くと言うので，魚釣りとかキャンプをしたり……というのを想像していた。ところが，それは普通のものではなかった。家に着いて，荷物を見た瞬間，「もしや……。」と気づいた。まさに私の冒険の始まりだった。3泊4日，とにかく歩き続けた。一緒に歩いたのは7人。... 私は何も分からずどうしようかと思った。でも Miku がいてくれたので心強かった。しかし，やっぱり不安ばかりで，ドキドキしていた。英語も十分に話せないけど，何を伝えるにも必要なのは言葉しかないのだ。... 11 kg のリュックを背負って，森の中をはい上がったり，川を渡ったりした。...
>
> 一日目は，とても長く感じた。夜になって，テントを張り，寝袋を

99　同上，25－26ページ，『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，20ページ。

100　同上，10ページ。

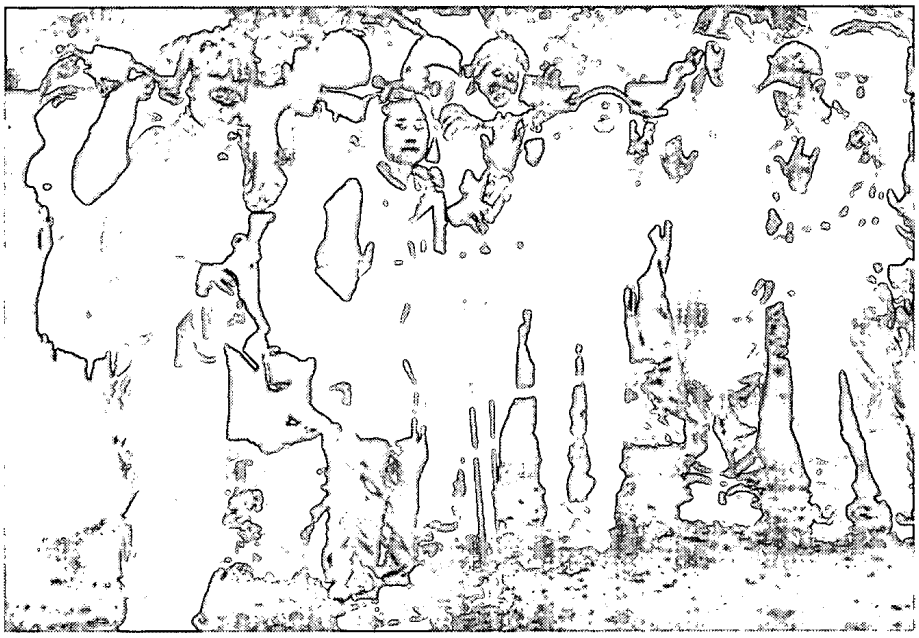
使って寝る。初体験だった。かなり心地良かった。荷物は全部，離れにある，高い場所に上げておく。(これはクマよけらしい)なんとクマが出る山だというので，ずっとびくびくしてしまった。結局，私は一度も見ることはなかったけど，実は二回程，近くに来たらしい。... 3日目，とてつもない日だなんて，予想もつかなかった。朝5：00に起きて準備して出発。なんと雪山，岩山，国境……と，驚き続けであった。今思うと，とてつもないpowerが知らずのうちに出ていたんだなぁと感じる。あの岩山を登ったことを。私は登っている時，本当に死んでしまうと思った。... 見ず知らずの人なのに，誰でも，声を掛け，励ましあっている。私も，たくさんの人に応援してもらった。みんな目標は同じなのでとても力になった。そういう姿は，やっぱり感動だった。そしてアメリカからカナダへの国境を山の頂上で越えてしまった。... 最後の道はなんと線路。映画のシーンみたいだと思った。でも... 先の方にトラックが見えた!! まさに，そこがゴールだった。留守番だったお父さんが迎えに来てくれていた。

Whitehorseに帰ると，周りの人達が皆さん，ほめてくれた。この，CHILCOOT TRAILというのを達成したのは，意外にすごいことなのだ。... こうやって，誰にでもできないことを，特別でやらせてもらって，本当にうれしかった。そして今まで以上に，PeterやMamと，仲良くなれたし，英語を使って，人に話せる勇気が，できた気がする。でも，まだまだ力不足だということも実感した。もっと笑って，サラサラと会話が成り立つように，更に勉強したいと思った[101]。

まさかハイキングが「3泊4日」だなんて，日本人の想像を越えている。11 kgのリュックを背負って，もちろん歩くのを楽しむ余裕などなく，「本当に死んでしまうと思った」というのが実感であろう。熊が出てくるのもお構いなく，テントを張り寝袋で寝る。そして熊に荒らされないようにと，

---

[101] 同上，12ページ，22ページ。



ハイキング

「荷物は全部，離れにある，高い場所に上げておく」などと，まさにカナダ的キャンプである。山の上で国境を歩いて越えるという事も経験する。そして，最後は，みんなと一緒に「とても出来ないと思えた事」をやり遂げたという充実感を体全体で味わうことになる。そして「今まで以上に，Peter や Mam と，仲良くなれたし，英語を使って，人に話せる勇気が，できた気がする。」と述べているように，大切なものを手に入れたのである[102]。

---

[102] 日本的感覚からすれば，ハイキングというのは日帰り感覚ではないだろうか。しかし，カナダの自然は大きい。筆者も一度オンタリオ州のアルゴンキン・パークに行った時には似たような経験をしたことがある。案内版に，長短様々なハイキングコースが描かれていたので，気軽に考えて一番短いコースを選んでしまった。道というよりも，印がついている木々を頼りに歩いていくのである。ところが，なかなか中間地点が現れない。日が暮れてくる気配で，そのうちに駆け足のようなスピードで必死になって，やっと出発点まで辿り着いたものである。一番短いハイキングコース，それは普通に歩けば10時間はかかるコースであった。従って，案内版に描かれた長いコースは，3泊，4泊は当たり前で，長いのは1週間とかかかるということであろう。

(4) 自然とカナダ人

ホワイトホースには，すぐ傍に自然があり，日常の中に自然があり，自然の中に日常がある。普段の生活の中で，ゴルフや散歩をしたりする際にも，雄大な自然に接し魅了されるようである。さらに，カナダのシンボルであるビーバーに出会ったり，fish ladder に出会ったりして，カナダ人が雄大な自然の中の生き物に対してどのように考えているのかも知ることができるのである。牛久の若者たちは，それぞれ次のように述べている。

> ある日三人でゴルフに行った。といってもパターゴルフや練習場ではない本物のゴルフコースに出たのだ。ゴルフはもちろん楽しかった。そしてそれ以上に感動したのはその景色である。コースの合間から眺めた湖や遠くの青空の下にそびえる山々はまさに絶景であった[103]。

> Janice が散歩に連れていってくれた。林をかき分けていくと，そこには大自然が広がっていた。澄んだ空気に大きな湖，そしてそれを囲む大きな森と，遠くにはてっぺんにうっすら雪のかかった山々が見渡せた。そのすばらしい景色に感動した[104]。

> 夕食の後散歩に行くと，川にビーバーの家があり，すごく大きくてその上にのれるくらい頑丈だった。目の前にはビーバーが泳いでいた。まわりの木はビーバーが食いちぎった跡がたくさんあった。けっこう太い木だったのであんなものを歯で自分の家まで持っていくというのを聞いたときは驚いた[105]。

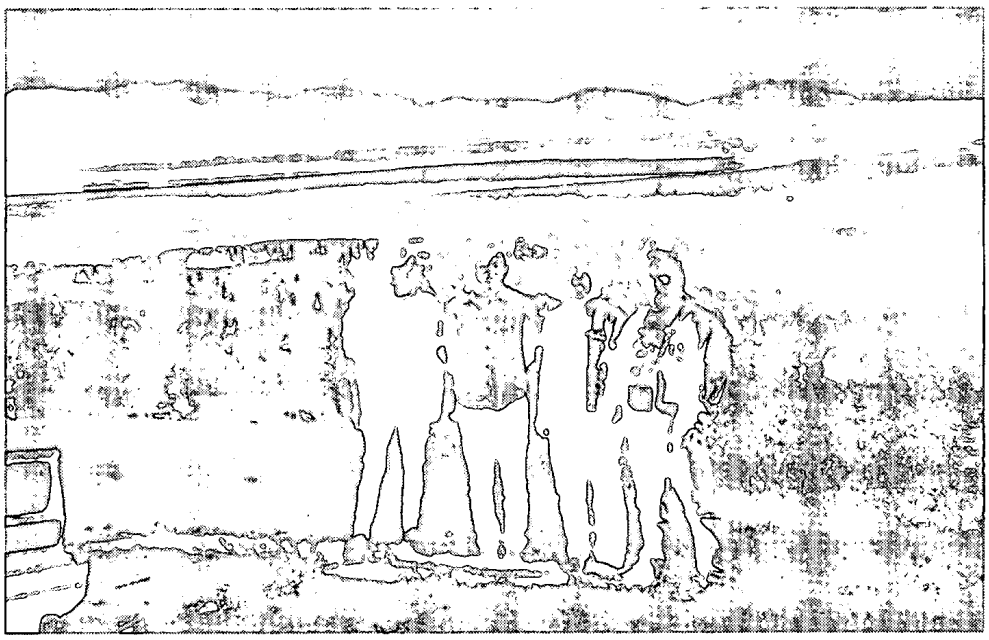
> 今日は，カヌーをしました。マウンテンバイクで，Fish ladder まで

---

103 『1998 年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，6 ページ。

104 同上，9 ページ。

105 同上，8 ページ。



大自然の中で

いった。ダムが作られたため，サケ達が川をのぼれなくなってしまったので人工的に魚道を作ったんだそうな。やさしいカナダ人，大好き。ダムはすごくキレイで美しい所でした[106]。

ここから伝わってくるのは，ほんとに雄大な自然とともに日常生活があるということであろう。そして，カナダの自然とビーバーの関係や，カナダ人がビーバーに対してどのように思っているのかが伝わってくる。一緒のカナダ人が，ビーバーが川の中に家やダムを作って川の流れを調整したり，ビーバーに対するカナダ人の思いを説明している様子が目に浮かんでくる。さらに，実際に〝fish ladder〟を見た生徒は，「やさしいカナダ人」と表現しているが，カナダ人が自然と鮭との関係をどのように考えているのかは，一目瞭然である。

(5)　料理に満足

カナダから日本に来た場合，特に青少年の場合には日本食が苦手という事がかなりあるが，牛久の高校生の場合にはホワイトホースでの食事には

106　『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，23ページ。

満足しているようである。その様子を生徒たちは次のように述べている。

今日はゆっくり起きた。朝ごはんのパンケーキもおいしい[107]。

リンダさんは，毎朝とってもおいしい，大きなマフィンやワッフル，シリアル，フルーツポンチ，山盛りのイチゴなどいろいろな種類の朝食を用意してくれ，少々太ってしまいました[108]。

場所によれば，朝食は簡単なシリアルだけですませる所も多いが，ホワイトホースのホストファミリーでは，朝から色々と手をかけた食事を作ってくれるようである。

朝食だけではなく，ケーキやデザート，夕食なども手の込んだ物を作る家庭が一般的なようである。生徒たちは次のように述べている。

ホストマザーの Renate は，お菓子作りがとても上手。毎日のようにおいしいケーキを作ってくれた。... [109]

Kim さんは，料理がとても上手で，アップルパイやグラタンをつくってくれて，それがとてもおいしかったです。特にアップルパイは絶品で，2個も食べてしまいました[110]。

お母さんはとても料理上手で夕食はいつもデザートがでたり初めて食べるものがでていつもごちそうでした[111]。

---

107 『1998年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，24ページ。

108 同上，22ページ。

109 同上，16ページ。

110 同上，20ページ。

111 『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，17ページ。

昼食はホワイトホース市が提供する食事で，夜はRickとJaniceの手料理でした。かなり凝った料理をご馳走してくれたので私の体重は目立って増えてしまいました[112]。

使う材料も，ある生徒が「Dadご自慢の家庭菜園でできたとれたて野菜もとてもおいしかった」と述べているように，新鮮な自家製の野菜を使っている所も多いのであろう[113]。

さて，上のことからいくつかの事が言えるであろう。まず，料理やお菓子作りの好きな人たちが多く，手料理が多いということは，それだけでも「ゆとり」を感じさせるものである。そして，手作りの過程を通して，家族がやりとりする姿も想像される。次に，牛久の高校生たちにとっては，「今までに食べたことのない料理や味」に出会い，そのような存在を知り，さらに「味覚の領域」が広がったことであろう。そして，どう解釈して良いのか戸惑うところが一点あるが，それは牛久の高校生たちが出された料理の味について満足しているということである。普通は，「ケーキが甘過ぎる」とか，「料理が口に合わない」と言ったことは，しばしば耳にすることである。ホワイトホースの場合には，全然そのような意見は出ていない。全体的に考えてみて，ヨーロッパ諸国の料理や味は比較的日本人の口に合うようなので，この辺りの人々はそのような国々の文化的背景を持った人たちが多いのかも知れない。

(6)　男も料理と手伝い

牛久の高校生たちは，カナダの家庭の中で日本ではあまり見ない光景を見ることになる。それは，父親が料理をしたり，男の子が夕食の手伝いをする姿などである。そのような様子は，次ぎのように述べられている。

朝起きるとホストファーザーがキッチンでワッフルをつくっていた

112　同上，18ページ。

113　同上，15ページ。

のでおどろいた[114]。

お父さんのRick，お母さんのJanice... Rickはパン作りの名人で2週間に一度12斤の食パンを焼くので朝は必ずトーストと蜂蜜を食べました。... 夜はRickとJaniceの手料理でした[115]。

... 別れの朝もいつものようにJonathonがフレンチトーストとブルーベリーの朝食を用意してくれた。ブルーベリーの甘ずっぱい味は別れの涙の味と共に忘れることができない[116]。

このように父親が料理を作る姿を見て，「おどろいた」と述べている生徒もいれば，滞在中に見慣れてしまったのか何も述べていない生徒もいる。いずれにせよ，日本では父親が料理を作る姿を見ることは稀なことである。そして，それを契機に「父親も家事をすべし」と考えたり，あるいは「少なくとも日本では5時に帰宅は不可能」なので単純に比較はできないと考えたり，様々な事を考えることになるかも知れない。あるいは，男であるか女であるかに関係なく，料理を手伝うようになるかも知れない。

また，ある女生徒は夕食後，みんなが協力して片付けている様子を次ぎのように述べている。

夕食の手伝いもみんなでやりました。そこで驚いたのが，日本の男の子はあまり夕食の手伝いをしないのに対し，Joeは文句も言わずにDebbieに言われたことをちゃんとやっていました。私も日本ではめったにやらないお手伝いをしました[117]。

---

114 『1998年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，24ページ。

115 『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，18ページ。

116 同上，19ページ。

117 同上，8ページ。

「日本の男の子はあまり夕食の手伝いをしない」し，女の子も「日本ではめったにやらない」と自ら述べているように，日本では男の子も女の子も家事の手伝いは免除というような状況であり，それが「当たり前」だと思っている。しかし，ホームステイの家族の男の子も「文句も言わずに」手伝っているのを目の当たりにして，日本の家庭とは大いに異なっていることを認識し，自分も「日本ではめったにやらないお手伝い」をしたのである。

大袈裟ではあるが，まさに「異文化の中に身をおく」ことの影響だと言える。日本の家庭で，自ら進んで食事の後片付けを手伝うということは可能であろうか。高校生ともなれば，親の言うことが正しいと思っても，素直に耳を傾けることは難しい。親が後片付けの手伝いを頼んだとしても，「勉強があるから」と言えば「立派な理由」であり，大方の家庭では「仕方がない」という状況であろう。そして，それでも手伝ってもらおうとすれば，それこそ口論になり気まずくなるのは目に見えている。上のように，「私も日本ではめったにやらないお手伝いをしました」と意識して自らの行動を変えることができるのは，まさに「異文化という環境」のお陰であると言えよう。

3．ホワイトホースの受入方式

(1)　カナダ流ホームステイ

牛久市役所の担当の方がホワイトホースとのやりとりの中で違和感を抱いていた点については既に触れたが，それは「カナダ流受入」の方法と関係しているようである。まず，牛久の若者をびっくりさせ，牛久市の担当者を驚かせるのは，ホワイトホースに到着してから「ホームステイ先」が変更になっているという点や，到着時にはホームステイの家族と顔を合わすことができないなどである。ある生徒は，「急にホームステイ先が変更になって不安だった」と述べているが[118]，結果的には「とても優しいホストでうれしかった。」とのことである[119]。そのような状況を，別の生徒も次の

118　『1998年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，23ページ。

119　同上。

ように語っている。

今年の夏,私は今までに味わったことのない感動をたくさんしました。初めてのカナダ，初めてのホームステイ，不安と期待を胸にホワイトホースにやってきました。私は向こうに着いてすぐ，ホストが変更になったことを聞き，どうしようかと思ったけれど，ホストファミリーに Hillary という同じ年の女の子がいたので安心しました[120]。

またホストファミリーが休暇に行っており，到着時には会えなかったというケースもある。ある女生徒は次にように話している。

私のホストファミリーの Jonathon 一家がバケーションに行っていたため，出会ったのがホワイトホースに到着した次の日だった[121]。

このような場合,「初日は事情により４人でステイしました」というように，別のホームステイ先に世話になり他の生徒と一緒ということになる。しかし，生徒たちは「だからなんとなく心強い気がしたけど，たくさん日本語を使ってしまって後で反省しました。」などと述べているように，幸いそれほど気にしている様子はない[122]。

以上のことから分かることは，ホストファミリーは自分たちのスケジュールを最優先しているということである。同様の事は家族全員についても言えることであり，時には１日早く別れなければならない場合もあるようである。その様子を，生徒たちは次のように話している。

今日はついにホストファミリーとの対面だった。全員に会いたかっ

---

120 同上，12 ページ。

121 『2001 年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，19 ページ。

122 同上，15 ページ。

たけどホストマザーとブラザーはバンクーバーにいるらしく，ホストファーザーとシスターが迎えにきて，案内してくれた[123]。

ホストブラザーのCameronは私が着く前に外国にホームステイに行ってしまっていて，同じくブラザーのAndrewも，私が行って二日目に外国に行ってしまったので，2人とあまり過ごせなかったのが残念だが，楽しく生活できた[124]。

残念ながら，ホストファーザーのRobertには一回も会うことができませんでした[125]。

ファーザーのJimが途中から仕事の都合で出掛けてしまい，その後はマザーPatが，看護婦として忙しいのに，毎朝市役所に僕らを送ってくれた。本当に忙しい時はマクドナルドで朝食をとった時もあった[126]。

一番私のことを心配してくれて優しいホストマザーには特にお世話になった。しかし一日早く，ホストマザーとお別れになってしまいとても残念だった。ホストマザーは「お母さんがいないから今日はみくがお母さん代わりだよ」と言って，私にまた夕食を作る機会をくれた。おいしいと言ってくれたのでうれしかった[127]。

ホームステイが突然変わるし，生徒たちが到着しても肝心のホスト

123　同上，21ページ。
124　同上，11ページ。
125　同上，8ページ。
126　同上，14ページ。
127　同上，10ページ。

ファミリーは出迎えにはきていない。まさに牛久市役所の担当の方が驚くのは無理はない。しかし，これらの事から言えることは，ホストファミリーの家庭は「自分たちの日常生活の中で」，牛久の若者たちの受入を行っているということである。共働きも多いし，職種によれば夜勤明けの朝帰りということもある。上に述べられているように，「忙しいなか毎朝市役所に送ってくれ」,「本当に忙しい時はマクドナルドで朝食をとった時もあった」という状況の中で受け入れてくれるのである。多分，日本であれば共働きで忙しい状況では，とても受入るという気持ちにはならないだろう。そして，受入のために自分たちの予定を変更しなければならないのであれば，気持ちの上でも無理をするということになろう。ところが，カナダのホストファミリーはそのようなことはなく，まさに日常生活を営みながら受け入れている。日本的感覚からすれば，非常に気楽に受入を行っていると言えよう。しかし，だからこそ，生徒たちも客人扱いされることはないので，より親近感を抱くことになるのではないだろうか。

(2) オープンな人間関係と多くの出会い

カナダ流ホームステイについては既に見た通りであるが，受入れ中に関しても注目すべき特徴が現れている。それはホストファミリーたちの人間関係に基づいたものであり，牛久の若者たちはホストファミリー以外の人たちに接する多くの機会に恵まれることになるのである。街の中で知り合いと出会えば，紹介してくれて話しに加わることができる。さらに，知人や友人を招いたり，知人の家に泊まりに行ったり，ホストファミリー同士が行き来をして，多くの人たちと接することができるのである。

日常生活の中で

街の中での様子を，ある女生徒は次ぎのように述べている。

私のホストは，Perry さんとその奥さんの Kim さん夫婦でした。子供のいない家庭でしたが，そのかわり友達の多い夫婦でした。シティホールの近くへショッピングに行ったとき，偶然 Kim さんの友達に会い，私の紹介や最近の出来事を話していたのを見て，「もっと英語を勉

強しておけば良かった」と本当に思いました[128]。

カナダでは知らない人が居る場合は紹介されて話しの中に入れるようにするのが普通であるが，日本では紹介してもらって言葉を交わすことは極めて少ない。

またグループで行動をしたりすることもあるようで，例えば山登りをした時などは，「ホスト以外と話すのは初めてでドキドキしたが，少しだけど自分の言いたいことが伝わってうれしかった。」と[129]，その時の喜びを伝えている生徒もいる。さらに，隣人と友達になって一緒に遊んだり，他のホストファミリーとも簡単に行き来ができるようである。ある女生徒の話である。

> 他のホストファミリーとも友達になる事ができました。隣の家の双子の兄弟とトランポリンやバスケットボールをして遊んだり，ジャッキーの親友のシェリーと一緒にドライブやお散歩をしたり，みんなでカヌーに乗りに行った時には林全体を使ってケイドロみたいなゲームをしたりと最高に楽しい日々を送りました。こうした楽しい人との交流が日本へ帰りたくなくさせた二つ目の理由でした[130]。

このように日常生活の中でも，開放的な人間関係が基礎にあるのが判る。そして，そこから牛久の若者たちが，「英語ができたら会話に加わることができるのに」とチョッピリ反省したり，ドキドキしながらも伝える喜びを感じたり，体全体を使って第三者とどのように関わっていったら良いのかを学んでいると言えよう。

---

128 『1998年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，20ページ。

129 同上，24ページ。

130 『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，20ページ。

知人を招いて

友人や知人を自宅に招くということも，特別な機会でなくとも珍しいことではないようである。そして牛久の若者たちも，それらのカナダ人と知り合いになるのだが，その様子を次のように述べている。

> ホストはいろんなところに私を連れていって，いろんな体験をする機会を与えてくれました。それにホストのおかげで，たくさんの人と出会うこともできました。家には，毎晩のようにお客さんが来て，一緒に日本やカナダのことを話したり，プレイステーションしたり。本当に，毎日が充実していて，時間はあっとう間に過ぎてしまいました[131]。

このように家庭に知人を招いて一緒に過ごすということは，カナダでは普通のことである。子供たちも，そこに混じって，どんな話をしたら良いのか，どんな行動をすれば良いのかと言った社会性を身に付けることができるのである。居間にお客を招き，「隠したい物」は地下室などに移すことも容易だという住宅の構造上の違いも大きいのかも知れない。

知人宅に泊まる

牛久の若者たちが，ホストの知人宅に泊めてもらうということも一般的なことのようである。時として，ホストたちが夫婦のみで子供がいないような場合には，子供のいる家庭を経験してもらうという配慮もあるようだ。生徒たちは，それぞれ次のように話している。

> それから，ユーコンガーデンのメトロポリトさんの家に3泊しました。5人家族で，ホリー，ジャッキー，キャシーの3人の女の子がいました。夜には，別荘のある湖に泳ぎに行きました。水はとても冷たかったのに，ホリーたちは平気そうだったのを見て，カナダの人はこ

---

131 『1998年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，17ページ。

れが普通なんだ，すごいなと感心しました[132]。

クミさんにはいろいろな体験をさせてもらった。クミさんの知り合いの家で乗馬をした。初めてだったがとても楽しかった。その中でも一番いい思い出に残ったのは2日間ホームステイさせてもらった...6人家族に泊まらせてもらった。...家には4人のりのトランポリンがあって，サリーとダニーと私と堀切さんとで一緒にのって遊んだり，バドミントンをやったりしてとても楽しかった[133]。

私のホストはPierreと明美さんの夫婦だった。Pierreはおとなしい人で普段はhair dresserで土・日はアマチュアwriterをしていた。明美さんは書類を作っていた。...子供がいないホストだったので途中2日間，りっちゃんとFozardさん家へホームステイに行った。... 森の奥にある大きな家だった。特にSallyとDanicaとは，一緒にトランポリンをしたりバドミントンをしたり折り紙をしたりした[134]。

以上のことから，招いたり招かれたりが，ごく気軽に行われるような人間関係が存在していることが判る。日本では，時間的余裕と空間的余裕がないためか，あるいは人間関係が煩わしいためか，知人同士がこのような関係を持つ事は稀なことであろう。まして，その知人や友人に姉妹都市から来た若者を預けるという考えも起こらなければ，そんな事を頼む事もできることではないだろう。この点が，ホワイトホースの人間関係と非常に異なるところである。そして，有り難いことに，牛久の若者たちは，そのようなカナダの人間関係のみならず，初めて出会う第三者とどのように接していくのかを学ぶことができるのである。

132　同上，11ページ。

133　同上，8ページ。

134　同上，9ページ。

(3) 市長が歓迎

牛久の高校生たちは，夢中になって毎日やることがイッパイで，ホワイトホース市長が招いてくれたバーベキューや歓迎式典などには，あまり関心がなさそうで，ごく簡単にしか触れていない。しかし，それでもカナダ流の歓迎の仕方や，市長の歓迎の熱意が十分伝わってくるものである。二人の生徒は次のように述べている。

> お昼ご飯の間，市長さんからあいさつがあり，オーケストラが演奏してくれた。こんなりっぱな歓迎会を開いてくれて感謝，感謝[135]。

さすがに，オーケストラが演奏してくれる昼食は初めての事のようで，「こんなりっぱな歓迎会を開いてくれて感謝」している。ホワイトホース市長の歓迎の意が，きっちりと伝わっているようである。

別の生徒は，市長宅で行われたバーベキューパーティーの時の様子を次のように述べている。

> 市長さんの家でB. B. Qした。サーモンがうまかったな。川みながら食べてたら，タイラーに席があるよって... [136]。

市長宅の庭は川が見える所にあり，B. B. Qにみんなが招待され，サーモンもバーベキューにしているのが分かる。広々とした庭で，恐らくサーモンのバーベキューを食べるのは初めてのことだろう。そりゃー，「うまかった」はずである。生徒の目での観察は，ここまでであるが，大人の目であれば恐らく日本では市長が自宅の庭でB. B. Qをすることもないし，そこに招くことはあり得ないので，カナダと日本との違いに思いをいたすことであろう。

---

135 同上，24ページ。

136 『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，23ページ。

さて，ある年には英語教員が団長となって引率していったことがあるが，その教師は歓迎式の模様を次のように観察している。

> 歓迎式では，市長代理の話のあと「スズキ・メソッド」で学んだ地元の子供たちによるバイオリンの演奏があった。一生懸命この日のために練習した姿が見え微笑ましかった。しかも昔の文部省唱歌がたくさん含まれており，思わず懐かしさと嬉しさがこみ上げてきた[137]。

さすが教員である。この観察から，「スズキ・メソッド」が普及しているのが分かるし，多分，地元に日本人が居るのだろう，それらの日本人がかなり関わっているというのが分かる。そして，それらの日本人は「昔の文部省唱歌」が分かる年代の人たちなのかも知れない。上述の英語教員は，「昔の文部省唱歌がたくさん含まれており，思わず懐かしさと嬉しさがこみ上げてきた」と述べており，感激している様子が伝わってくるが，多分，高校生たちは何の歌なのか分からなかったに違いない。それはともかく，高校生たちにも「何やら日本の歌を演奏してくれている」ということは分かっているはずで，ホワイトホース市長の歓迎の心意気は通じたものと思われる。

4．ホームステイでの交流

(1)　日本への興味関心と好意的態度

ホワイトホースのホストファミリーは，日本への高い興味関心を持ち，牛久の若者たちに対して非常に好意的な態度で接してくれている。ある生徒は，「ホストはとても日本のことに興味を持っていて教えるのが大変。やはり，自分の英語力のおろかなことを思い知った。」と述べ，別の生徒は，「私のホストは日本のことにすごく興味を持っていて，12時過ぎまで話していた（私はねむかった）」述べている[138]。また，団長を務めた女子大学生

137　同上，7ページ。

138　『1998年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，23-24ページ。

は，「一見クールに見えて，パソコンで〝スキヤキソング〟を探したり，日本の事を少しでも理解しようと努力してくれたDad。」と述べ，ホストの好意が伝わってくるようである[139]。さらに，別の生徒はホスト側の熱意について，次のように語っている。

> 食事の後は，日本語を教えてほしいと言われたので，自分の持っている限りの知識とジェスチャーで会話をしました。ひらがな，カタカナ，漢字，それぞれの文字で日本語を紹介したら，Perryさんは「日本語はたくさんあって難しいね。英語は26文字だから簡単だね」と笑顔で言いました[140]。

このように日本に対して興味関心を抱いているだけではなく，牛久市からの若者たちに自ら日本料理を作ってくれるなど，さらに積極的な態度と行為を見ることができる。その様子をある女生徒は次のような言葉で語っている。

> 日本食が好きで，ダシの入っていないみそ汁を作ってくれたり，ご飯を炊いてくれたりした[141]。

ご飯を炊いてくれるだけではなく，味噌汁まで作ってくれるという訳である。「ダシの入っていない」味噌汁は，「ダシの香り」が駄目なのか，それとも単純に「味噌汁には不可欠」であるのを知らないだけなのか，その点は不明であるが，いずれにせよホストの積極的な心遣いが感じられる。「味噌の匂い」に抵抗感がある文化において，自らが味噌汁を作ってくれるということは，「文化のバリアー」をかなり越えた人たちのように解釈される。

---

139 『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，6ページ。

140 同上，20ページ。

141 同上，11ページ。

また，ある女子高校生は大学3年生の団長と二人でホームステイをしたが，それぞれ日曜日の夕食について次のように語っている。

> Clayton一家はお父さんのHarold, お母さんのSuesun...私と団長の立山麻衣子さんが一緒にstayしました。Stay 2日目の夕飯にお寿司を作ってくれて，3人で寿司ゲームをしてみんなワサビで泣きまくっていました[142]。

> 夕食にママさんがアボガド入の手巻き寿司を作ってくれた。3人でジャンケンして負けた人がワサビたっぷりつけた寿司を食べるゲームをする。うまくしゃべれなくても，笑うだけでコミュニケーションってとれるんだと実感した日だった[143]。

近頃，カナダの都市ではスーパーなどでも細巻きの寿司が売られているのを見かけるが，家庭でこのように「手巻き寿司」をつくるところは少ないのではないだろうか。海苔もワサビも揃っているようであるし，寿司ご飯も問題なく出来ているようである。何よりも，日本料理を家庭で作ろうという気構えに日本に対する情熱を感じないわけにはいかない。さらに，〝sushi〟を媒体として笑いを共有し，お互いの言葉の壁を破っている様がよく伝わってくる。

上に見たように，ホストファミリーの人々が日本に対して非常に好意を抱いており，そのことは十分に牛久の若者たちに伝わっている。このような雰囲気が，後に見るように「ホワイトホースを離れたくない」，「ホワイトホース大好き」という感情に繋がっているのである。

142　同上，17ページ。

143　同上，22ページ。

(2) ホストの態度と接し方

分かり合おうとする態度

ホワイトホースでは体を動かして活動する事がいっぱいで，牛久の高校生たちは，言葉を使わなくても十分楽しく過ごしている。しかし，ホストとの会話ではやりとりに悪戦苦闘して，なかなか思う事が言えないもどかしさを感じている。そして，そのような状況で，生徒たちを感動させたのは，ホストの「分かろう」とする態度である。その様子を生徒たちは，次のように述べている。

> 本当にみんなやさしかった。私が英語を上手に話せない時も，いつも真剣に聞いてくれたり，分かりやすく説明して話してくれた[144]。

> 私はこの温かい家族と一緒に毎日を楽しく過ごしました。また，Jackieの部屋で一緒に寝たりしていたので，すぐうちとけあうことができ，彼女にいろいろなところへ連れていってもらって，いろいろなことを教えてもらいました。私も，彼女にはできる限り日本のことなどを教えました。私のつたない英語に，一生懸命耳を傾けてくれたJackie，本当に明るく，けれども優しくて気配りができる子なので大好きです[145]。

> 皆，自分のつたない英語を分かるまで真剣に聞いてくれた，私が分かるまでゆっくり，そして分かりやすい言葉で話してくれた。とてもうれしかった。しかしもっと勉強してくれば良かったと思った[146]。

> ホストファミリーにHillaryという同じ年の女の子がいたので安心

---

144 『1998年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，12ページ。

145 同上，19ページ。

146 『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，13ページ。

しました。Hillはとても同じ年には見えないくらい大人っぽくてびっくりしました。いつも私が言葉につまったりしても最後までちゃんと聞いてくれて，普段使っている速さよりもゆっくりしゃべってくれたことはすごくうれしかったです[147]。

このように真剣に耳を傾けてくれるだけではなく，話す時も単語を選びながら「ゆっくり」と話してくれたり，分かりやすく言い換えてくれたりするのである。さらには，辞書を引いて日本語で話そうとする努力をしてくれるホストも居るのである。その模様を，生徒たちは次のように話している。

第一印象の通り，2人はとても優しく接してくれ，特にお父さんは単語を選びながら話してくれたのがよくわかった。おかげで，「何を言っているのかわからない」ということはなく，リラックスして生活できた。が，相手の言っていることは理解できるのに，自分の言いたいことが英語にならないことが多々あった。自分の英語力のなさを痛感した。結局言いたいことの半分くらいしか言えず，ものすごく歯がゆい思いをした。こんなに英語が話せるようになりたいと思ったのは初めてだった[148]。

ホワイトホースでは，毎日，18才のDEEDEEといっしょにいました。最初はほとんど話せなかったけど，最後のほうは自分からも話せるようになりました。DEEDEEは私が理解できないと，いい方を変えたり，わかりやすく体で表現してくれたりして，とてもやさしかったです[149]。

ホストファーザーは，私が分からないときは辞書を引いて日本語を

---

147 『1998年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，12ページ。

148 『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，11ページ。

149 同上，16ページ。

話してくれたのでうれしかった[150]。

「たどたどしい英語を，ジッと待って聞いてくれ」て「やさしく言い換えてくれたり，ゆっくりと話して」くれる。多分，これまで，こんな風に相手と関わったことはないはずである。だからこそ，優しくて，温かくて，親切だ，と好感を持つのである。一言で言えば，「受入れられている」という感じであろう。そして，「相手の言っていることは理解できるのに，自分の言いたいことが英語にならないことが多々あった。自分の英語力のなさを痛感した。結局言いたいことの半分くらいしか言えず，ものすごく歯がゆい思いをした。こんなに英語が話せるようになりたいと思ったのは初めてだった。」と述べているように，もっと自分を伝えたいという衝動を感じ，英語を学びたいというパッションを強く自覚するようになるのである。

(3) 料理で超える言葉の壁

ホームステイ宅で，牛久のかなりの数の高校生たちが日本料理を作っている。これは，他の自治体の姉妹都市関係の例では余り見られない一つの特徴であると言える。恐らく普段は家庭で料理を作ることはないと思われるが，そのような高校生が，‘ラーメン’や‘おにぎり’‘お好み焼き’や寿司などを作るという積極的な行動をとり，相手に働きかけていっているのである。

ラーメンなどの麺類を作った生徒も何人か居て，その時の様子を次のように述べている。

私はホストファミリーに日本食を作った。日本食と言ってもラーメンとたぬきうどんだったけどホストファミリーは，使ったことのない箸を使ってくれた。「フォークでもいいよ」と言ったけど，箸を使って食べてくれたのでうれしかった。食べ終わった後，ジェームスが「みく，おいしかったよ」と言ってくれた言葉は今でも心に残っている[151]。

---

150 同上，10ページ。

151 同上。

Mam も Dad も私のことを本当の娘のようにかわいがってくれて，私がつくったうどんなどを遣いなれないはしで「very-good!」といって食べてくれました[152]。

日本食（素麺）を作った時にはみんなが「好き」と言ってくれました[153]。

素麺や‘うどん’などは汁に浸して食べるので，ほんとうに「好き」と思ったのかどうかは疑問であるが，「使ったことのない箸」で食べるところなども，気を使っている様子が見られる。

作るのが簡単な上に割と好まれるのがカレーであるが，そのカレーを作った生徒たちもいる。反応は上々で，その時の模様を次のように語っている。

夕食に私がカレーをつくった。とても喜んでくれたのがすごくうれしかった[154]。

夕食は私がカレーといなりずしを作った。おいしいと言ってくれてよかった[155]。

「とてもおいしいと言ってくれてよかった」と述べているように，料理を作って喜んでもらえる嬉しさがよく伝わってくる。

さらに，昼食や夕食にお好み焼きとかオムレツを作った生徒たちもいる。

---

152 『1998年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，12ページ。

153 『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，20ページ。

154 『1998年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，24ページ。

155 『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，25ページ。

昼食は私がお好み焼きをつくった。あまりあわなかったみたいだが，おいしいといって食べてくれた[156]。

夕食をつくった。オムレツにお好み焼き。みんな喜んでくれた。うれしい[157]。

夕食はいつも7時ごろで，私が一度料理した時はDebbieとJosephに手伝ってもらったのに8時を過ぎてしまったけど，みんな笑顔で私のつくったオムレツとお好み焼きを食べてくれました[158]。

オムレツは馴染みがあるし，お好み焼きは，ピザとパンケーキの合体に似ているので，あまり違和感がないかも知れない。それにしても，「笑顔で」食べてくれて，「おいしい」と喜んでくれる様は食べ物がもたらした「理解」である。

さらに手の込んだ寿司にチャレンジした男子生徒や，天ぷらに挑んだ女生徒もいる。

家にはDarrenの恋人のCathyも住んでいて，手巻き寿司を作った時は一緒に食べてくれた。Darrenとはあまり一緒に過ごすことはなかったが...Darrenとのあいさつはいつもこうだった。「Have a fun?」「yeah, of course!」[159]

Kimさんは，料理がとても上手で...そのお礼に，私は母から教わった天ぷらを作りました。ちょっと失敗してしまいましたが，Perryさん

---

156 『1998年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，26ページ。

157 同上，25ページ。

158 同上，17ページ。

159 『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，14ページ。

とKimさんは，とても喜んで食べてくれました[160]。

実は，この男子生徒は，Darrenとは「あまり一緒に過ごすことはなかったが...」と述べているところからも分かるように，ちょっと距離があったようだが，「寿司が」このギャップを埋めてくれたようである。そして，天ぷらを作った女生徒も，ちょっと失敗したけれど「とても喜んで食べてくれ」と述べている様に，その場の温かい雰囲気が伝わってくる。

家の中だけではなく，キャンプに行った時にもご飯を炊き，頑張った女生徒もいる。運悪く出来が良くなかったので，臨機応変に'おにぎり'にして食べたということである。この生徒は次のように述べている。

> キャンプをしたとき，初めて（電気コンロで）お米を炊きました。一つは上手く炊けたのですが，もう一方はしんが残ってしまったので，それをみんなで焼きおにぎりにして食べました[161]。

電気釜であれば簡単なことだが，電気コンロでご飯を炊くということは，かなり勇気がいることである。そして，「芯が残った分」は「みんなで焼きおにぎり」にするなど，なかなか機転を利かせて楽しんでいる様子が伝わってくる。

別れの日になり，せめてものお礼にという思いからか，ある女生徒は最後の昼食を作っている。

> 最後の別れの日，私は昼食におむすびとみそ汁を作ってあげた。失敗してしまったけどみんな食べてくれた[162]。

---

160 『1998年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，20ページ。

161 同上。

162 『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，9ページ。

多分ほとんどの生徒たちにとって，他人に料理を作ってあげるというのは，初めての経験ではなかったのだろうか。そして，「あまりあわなかったみたいだが」とか，「芯が残った」とか，「ちょっと失敗してしまいました」とか，必ずしも上手くできたわけではなかった。そして，「美味しい」と言いながらも，口に合わなければ残してしまうのがカナダの場合の一般的な傾向である。しかし，「笑顔で」，「おいしい」と言って，「喜んで」食べてくれる。しかも残しもせずに，である。「これが日本食だ」と思って食べてくれているのか，それとも，日本に対する強烈な憧れのせいか，あるいは，その他の理由があるのか，それは分からない。ただ言えることは，「慣れない箸を使い」，「笑顔」で，「残さずに食べてくれる」ことから，ホストの人たちの心遣いを感じない訳にはいかない。そして，それらの態度が心理的距離感を縮めて，牛久の生徒たちに「分かり合えた」という安心感と満足感を与えていると言うことだけは確かである。

5．ホワイトホース滞在が与えたもの

(1) 感動が涙になって

夏時間と短い夜のせいで，2週間という滞在期間でありながらも，活動できる時間の量はその倍に相当することになろう。しかし，楽しい時ほど早く過ぎ去ってしまう。その滞在期間中も，「一度も日本へ帰りたいと思いませんでした。できる事なら，このままずっとカナダにいたい気持ちでした。」と多くの生徒が述べている[163]。そして，「最後のパーティーの時には『このまま時が止まってくれれば』とさえ思った」と述べている者もいる[164]。このように段々とホワイトホースを去る日が近づいてくると，別れが悲しくなるのは牛久の若者だけではなく，同じような気持ちになるホストもいるようである。そのような様子を団長の大学3年生が述べている。

---

163 同上，20ページ。

164 『1998年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，7ページ。

ホワイトホース滞在も最後の夜，荷作りも終わり，みんなが寝た後，一家の主であるDouglasがシェリー酒をすすめてくれた。彼は私にホワイトホースの冬の話や自分の若いころの話をしてくれた。一杯目を飲み干し二杯目のグラスを持ってきてくれた彼の目には涙が流れていた。私もそれを見て急にさみしくなり，こらえきれず泣いてしまった。もう会えないというわけではないが，やはり別れが悲しかった[165]。

帰りたくない

そして，いよいよ別れが迫ってくると，生徒の多くは「帰りたくない」と，その心境を次のように口々に語っている。

本当に毎日が楽しくて，お別れの日には本気で日本に帰りたくなかった。泣いている私に優しく「またおいで」と言葉をかけてくれて，それが嬉しくてまた泣いた[166]。

本当にもっとたくさんいたい。何で帰らなきゃいけないの[167]。

ここでの生活は，日本と違うことが多くてとまどったり困ったりしたこともあったけど，今ではかなりなじんでいると思う。できるなら帰りたくないよ―[168]。

ホストやホワイトホースのみんなとお別れがすごくすごく悲しくて涙がいっぱい出た。このままここに残りたい[169]。

165　同上，6ページ。

166　『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，11ページ。

167　『1998年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，26ページ。

168　同上，26ページ。

169　同上.

今日はついに別れの日だ。本当にいやだった。帰りたくない。しかも，まだまだ話したいことあるのに……。今思うと，なんで，あの時……とか，あーいえばよかった……とか思う。でもその時，言えなかった自分に反省。次くるときは，もっと話すようになってやると決心!!

今日は，パパ，ママが仕事だったのに，お昼に帰ってきてくれて，Downtown のメキシコ料理の店へ……。そこでパパとお別れだ。本当にパパ大好き。そして空港へ。私，どうしても泣けなかった。泣きたくなかった。でも，すごくさみしい。帰りたくないと思った[170]。

今までに筆者はカナダと姉妹提携をしている 40 程の自治体を訪れたが，これほどまでに多く者が「帰りたくない」と述べているケースは初めてである。この事は，生徒たちがいかに充実した体験をしてきたかを，雄弁に物語るものであろう。

また来たい／いつでも戻っておいで

帰りたくないと言う気持ちがあっても，それが無理であるのは分かっている。だから，その気持ちと同時に，「また来たい」という強い思いが生徒たちの心に存在するのである。

別れは本当に辛かった。私達みんな Whitehorse から別れたくなくて，なかなか飛行機に乗れなかった。絶対にまたカナダに戻って来たいと強く思った[171]。

… 楽しい時間はあっという間に過ぎてしまい，とうとう出発の日がきてしまいました。私はホストファミリーにたくさん言いたいことがあったけど悲しくてありがとうという言葉しか出てきませんでした。でも，そんな私を DEEDEE は最後まで何度も抱きしめてくれて

---

170 『2001 年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，26 ページ。

171 同上，13 ページ。

「また来てね」と言ってくれました。私は絶対にまたここへ来ようと思いました[172]。

それからRickの職場見学にいった。Rickは照れていた。もうすぐ別れの時が近づいているというのに全くそんな気がしない。...アケミさんが「最後の別れをして下さい」と言った時に，ふいに淋しさと，悲しみがおそってきた。AlineとTomが別れ際にぬいぐるみをプレゼントしてくれた。たとえ短期間の滞在でも，こんなに別れが惜しい。またいつか絶対戻ってきたいと思った[173]。

たくさんの温かい心に触れて，別れは本当に辛いものだった。ずっと我慢していた涙も，最後の最後にはこらえきれなかった。バンクーバーへの帰りの飛行機で，私達は誰も，再びホワイトホースを訪れる日のことしか考えていなかったと思う[174]。

生徒たちの「帰りたくない」という気持ちに応えるように，ホストも「いつでも戻っておいで」と別れの言葉を述べるのである。

Patは仕事があるのに，空港へ駆けつけてくれた。僕を抱きしめてくれ，そしてこういうのだった。「今度は冬に来なさい。オーロラがきれいだよ」って。あの時の僕にとってあの一言より優しい言葉はなかった。体の奥から何とも言えない気持ちが溢れてきて，泣きそうになった[175]。

172　同上，16ページ。

173　同上，26ページ。

174　『1998年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，16ページ。

175　『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，14ページ。

Mam に私が「ずっとここにいたい」というと「じゃ，こっちの学校に通いなさい！」と目をうるませながら言ってくれたのは，すごく心に残っています。...

みんな「いつでも戻っておいで！　Yuka の部屋はあるから！」と言ってくれました。そして「今度は冬において。犬ぞりをするんだよ」と言われ，絶対また来るぞ，と心にちかいました[176]。

私が帰る日の朝，空港で「いつでも戻ってきなさい。今度はキャンプをしよう。」「あきこの誕生日には大きなバースデーカードを送るから。」と言ってくれたホスト。私はなんていい人達と出会うことができたんだろうと思い，涙があふれて止まりませんでした[177]。

家族としての別れ

2週間前には，不安を持っての出会い，姉妹都市からの訪問者としての出会いであった。そして，空間と時間を共にすることにより，今度は「家族」としての別れとなるのである。

いつの間にか時間は流れ，あっという間にホワイトホースで過ごす最後の夜になってしまい，僕自身別れの淋しさを感じていた。そのことに気付いた（？）ホストの両親 Jim と Pat が僕が使っている部屋に来て，僕の話を聞いてくれた。僕のつたない英語を真剣に聞いてくれた。別れの時も真剣になってくれた。「Thank you」としか言えない僕を2度，Pat は抱いてくれ別れを惜しんでくれた。言葉なんていらないと思った。ホストファミリーは僕を家族の一員として認めてくれた。そしてあたたかく包んでくれた。それだけでうれしかった[178]。

---

176 『1998年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，12ページ。

177 同上，17ページ。

178 同上，15ページ。

今日は別れの日。この日がずっと来ないことを願っていたが，来てしまった。「私は帰りたくない」と言ったら，ホストファミリーのみんなが「永年の別れじゃないよ。来年の夏，来るだろう。私達は家族だから大丈夫」って言ってくれた。でも，私達みんなWhitehorseから別れたくなくて，なかなか飛行機に乗れなかった。私はその時，Whitehorseの人，物，すべてに「ありがとう」と叫びたい気持ちだった[179]。

お別れのときはとてもつらかったけど，「今度は私が会いに行くわね。」とJackieが言ってくれて，「あなたは私の子供みたいなものだから，いなくなるとさびしいわ。」とMamが言ってくれたときはたまらなくうれしかった[180]。

牛久を出る時は，誰がこんな光景は想像していただろうか。ごく自然に出てくる「家族の一員」という言葉と，日本では他人の前ではちょっとできない「抱き合う」という仕草が，「たまらなく嬉しい」という気持ちにさせるのであろう。

堪え切れない涙

もう別れの前日に涙を流した者もいれば，空港へ送ってくれる車の中で泣いた者もいる。そして，「決して涙は見せない」と決心していた者も，最後の別れの時には，堪え切れなくなってしまうのである。

ホストと別れるときは，絶対泣かない!!　と決めていたのに，ホワイトホースの空港でチケットを見た瞬間，涙が出てきました[181]。

ぜったい泣かない!!　って思っていたのに，涙がとまらなかった。

179　同上，13ページ。

180　同上，19ページ。

181　同上，20ページ。

飛行機からホワイトホースを見下ろして，きっともう一度来るって思った。ここで得たもの，出会った多くの人たち，これらはみんな私にとってかけがえのない宝物だ[182]。

別れのとき，私はつらかった。他の女子も全員泣いてしまった。しかし私にはまだ未来がある。まだまだここに来られるチャンスはあるだろう。いや絶対に行く。この，牛久の仲間たちとカナダの仲間でともに過ごした思いでを私は永遠に忘れない[183]。

ホワイトホースから離れたくなかった。たくさん泣いた。みんなで泣いた。本当にホワイトホースの人々はやさしく受け入れてくれて，どんなに感謝してもしきれないほどだった[184]。

以上のように，ほぼ全員が「また来るぞ」，「戻ってくるぞ」という強い思いを抱きながら，涙の別れを体験している。こんな事は，彼らの17，8年の人生の中で，恐らく初めての経験ではないだろうか。12日間の凝縮された体験と思いが最後の段階になって現れている。そして，自分の体と精神に起こった大きな変化と体験を，生徒たちは正に自分の体をもって知ったということであろう。それが，堪えることのできない涙であり，「また来るぞ」という熱い思いということになる。そして，「私は，WHITEHORSEが大好きです。たくさんの楽しい思い出ありがとう!!　絶対に忘れない!!また，ホワイトホースに行きたい!!」という思いを抱きながら日本に向かうことになるのである[185]。

182　同上，26ページ。

183　同上，14ページ。

184　同上，26ページ。

185　『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，15ページ。

(2) 変化する自己を認識

楽しかった2週間のホームステイが何をもたらしたのかは，若者たち自身がはっきりと認識している。

優しさを，温かさを認識

多分，人の優しさとか温かさを認識したのは，他人と深く関わりあったホワイトホースでのホームステイが初めてのことであろう。生徒たちの言葉を聞いてみよう。

> 今日は別れの日。この日がずっと来ないことを願っていたが，来てしまった。「私は帰りたくない」と言ったら，ホストファミリーのみんなが「永年の別れじゃないよ。来年の夏，来るだろう。私達は家族だから大丈夫」って言ってくれた。でも，私達みんなWhitehorseから別れたくなくて，なかなか飛行機に乗れなかった。私はその時，Whitehorseの人，物，すべてに「ありがとう」と叫びたい気持ちだった。
>
> 今私は，本当に感謝している。この旅のおかげで，私は人のやさしさが一番よく分かった。...[186]

> リンダさんは私達に「ランデブー」というお祭りの期間に着る手作りのドレスを見せてくれたりと，サービス精神旺盛な人でした。毎朝とってもおいしい，大きなマフィンやワッフル，シリアル，フルーツポンチ，山盛りのイチゴなどいろいろな種類の朝食を用意してくれ，少々太ってしまいました。リンダさんは，夜遅く寝る私達に驚いたり，いつもその日の予定や行動を，ゆっくり分かりやすく説明して下さり，ホームステイするから分かる人々のやさしさに，帰るときには涙が止まりませんでした。どこに行っても人々の温かいフレンドシップと，心からの歓迎の気持ちに接することができました。そんな人々の心をつくる大きな広いカナダの大地を忘れません。さっそくリンダさんと

---

[186] 『1998年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，13ページ。

Eメールで連絡しあい，近い将来，再開の約束をしました[187]。

本当にもっとたくさんいたい。何で帰らなきゃいけないの。ここで得たもの，出会った多くの人たち，これらはみんな私にとってかけがえのない宝物だ。

ホワイトホースから離れたくなかった。たくさん泣いた。みんなで泣いた。本当にホワイトホースの人々はやさしく受け入れてくれて，どんなに感謝してもしきれないほどだった[188]。

異文化の中でホストファミリーと空間と時間を共にし深く関わりあうことによって，人の優しさと温かさとを認識し，感謝の心を抱くようになっている。それまでは，人と深く関わりあう必要もなければ，その機会もなかったことであろう。人の優しさを体験し，人の温かさを体験することは，まさにお金では買えないものである。だからこそ，感謝の気持ちを抱くのである。そして，ある女生徒が述べているように「私は，ホストの人達にたくさんの，すてきな思い出をもらったので，今度は日本に来て，私がたくさんの思い出を作ってあげたいです。」という気持ちになるのである[189]。

他者に働きかける勇気

ホワイトホース滞在中に，積極的になったきたと自ら自覚するようになった生徒も居る。その模様を次のように話している。

日記として書くことは少ない一日だった。しかし，僕自身の内面的なところでいろいろ変わってきた。まず女子と結構はなせるようになってきたこと。これは大きい。いつのまにかしゃべれるようになっていた。また，女子と話せるようになったことでファミリーに対する

---

187 同上，22ページ。

188 同上，26ページ。

189 同上，11ページ。

接し方も変わってきた。少し積極的になれたような気がする。自分から「あれがしたい」「こうしよう」と言えるようになった。あと英語も結構身についたかもしれない。しゃべる方はとにかく，聞く方はかなりよくなったと思う。あと2日精一杯楽しみたい[190]。

自分でも「まず女子と結構はなせるようになってきたこと。これは大きい。」と述べているように，嬉しさと自信が伝わってくる。「いつのまにかしゃべれるようになっていた。」とも述べているが，これはホワイトホースという環境の中で過ごしたからこそ，初めて可能になったものと思われる。

既に上に述べたように，牛久の高校生たちはカヌー，乗馬，トランポリンを始めとして，様々なアクティビィティに臆することなく取り組んでいる。それは，ある生徒が「ここでは個性がすべてはっきりしていた」と観察しているように，「周囲の目」が気になって「恥ずかしくてできない」という日本的な雰囲気とは無縁の所だからである。恐らく，日本であれば，ちょっとした失敗も笑われて萎縮してしまったことだろう。とても自分から，「こうしよう」というような状態にはなってはいなかっただろう。その意味で，ホワイトホースでこのような積極性を身につけ自信を持つようになったことは，この男子生徒にとっては人生における大切な宝物を手に入れたと言うことができる。そして，その他の生徒たちも，程度の差こそあれホワイトホースで同じような宝物を手に入れたはずである。

英語で人と接すること

ホワイトホースという異文化の中で生活することにより，英語を使って人と接するにはどうすれば良いのかについて，自分なりの考えを持つにいたった生徒もいる。その生徒は次のように述べている。

私が学んだことは主に英語でのコミュニケーションです。分からないときにはとにかく聞いてみること，分からないままにしておかない

---

190 『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』，前掲，25ページ。

ことが重要だと思いました。また心を開いて人の言うことに耳を傾けること，また自分の主張を明確にすること，間違いを気にせず話してみることなどが大事なことだと痛感しました。現地の若者たちと遊ぶときや Host-family にその日の出来事を尋ねられたとき，英語が自由に話せないからといって短くぶっきらぼうに言ったのでは快く思われないことが分かりました。逆に一生懸命話そうとすると相手も誠実に耳を傾けてくれました[191]。

明らかに，ホストファミリーとのコミュニケーションから学んでいる。日本では，日本語を使っていても，ぶっきらぼうな応対の仕方であっても，それで通用するので，それで良いと思ってしまうところがある。ところが，既に上に触れたように，不十分な英語で話してもホストファミリーの人たちは理解しようと真剣に聞いてくれ，さらに牛久の高校生たちが分かるような言い方をしてくれるのである。このような態度に接して，英語のコミュニケーションのみならず，人といかに接するのかを学んでいるのである。そして，それは異文化という環境の中だからこそ，可能になったように思われる。なぜなら，日本の中でこのようなコミュニケーションの仕方をしようとしても，周囲から浮き出てしまうので，まず，「恥ずかしい」という気持ちが先に立ってしまうことになるからである。

自分自身を見つめ直す

今までとは，あまりにも異なる環境に身を置くことにより，自分自身を見つめ直す切っ掛けとなった生徒もいる。その模様を次のように述べている。

こんな毎日を過ごしているうちに，早くも 10 日が過ぎてしまいました。ファミリーには，とてもいい思い出と，私が今やるべきこと，私がこれからどういう風に生きていきたいのかということなど，いまい

---

191 同上，18 ページ。

ちはっきりしなかったことを分からせてくれました。楽しかったことだけでなく，自分を見つめ直す，日本を見つめ直すことを教えてくれた10日間でした。とてもいい経験をしたので，ホワイトホースでえたものを無駄にしないように，今よりも一まわりも二まわりも成長して，その姿をホストファミリーに見せに，もう一度ホワイトホースに行きたいです[192]。

異文化の中に身を置くということは，自分自身と自分が育った国を客体視する機会を与えてくれるのである。この生徒の場合は，まさにそのような例である。そして，これを切っ掛けとして，今の自分自身を越えて行こうとする意欲をも持つようになっている。しかも，その大きくなった自分の姿を，もう一度ホストファミリーに見せに戻ってきたいというのである。このような気持ちになることなど，カナダに来る前に思ったことがあるだろうか。異文化と接触することにより，人はこんなにも変わりうるのである。

おわりに

本論では，姉妹都市提携の経緯から始めて，受け入れおよび青少年訪問団の派遣という分野での相互作用について見てきた。その全体を振り返ってみて，それぞれの分野における特徴や指摘すべきいくつかの点について触れておきたい。

まず第一に，受け入れの担当職員の相手側の担当部署と担当者に関する知識とコミュニケーションについてである。牛久市の担当職員は，カナダ側からの応答が遅れがちであると感じている点については指摘した通りであるが，同時に相手側の担当部署や担当者についての知識が必ずしも十分ではないという点である。一般的に，他の自治体の姉妹都市のケースの場

192　同上，8ページ。

合にも見られる事であるが，日本側の担当者はカナダ側からの応答が遅れがちであると感じるようである。これは，多分，行政組織の運営の違いが大きいと思われる。しかし，双方の担当者がこのような違いをも認識して，お互いの組織の「特徴」とその背景を知ることが，様々なレベルでコミュニケーションを円滑に行う基礎であると思われる。

第二に，受け入れの担当職員として，「伝統的な日本を見せたい」という「固定概念」からの脱却が必要であろう。「伝統的な日本を見せたい」というのは自然な気持ちであり，「日本まで来てディズニーランドはないでしょ！」と言いたい気持ちはよく理解できる。しかし，ちょっと視点を変えてみれば，全く異なって見えてくるのである。本論でも触れたように，ホワイトホースからの青少年にとっては，アメリカのディズニーランドよりも東京ディズニーランドの方が近いのである。そして，「東京ディズニーランド」に行って来たことは，帰って友達に自慢できる大きなお土産になるのである。「見たい物，見せたい物」については，現在も相手方との話し合いで決められているが，上述のようなコミュニケーションが実現すれば，より満足度の高い結果を得ることができるであろう。

第三に，受け入れ側のホストに関しては，「英語でしゃべらナイト」という「固定概念」からの脱却が必要であろう。本論では，「寝室に入りエアコンと止めた」ことと「掃除を我慢した」ことについて触れた。これらは，残念ながら「日本的な表現方式」では「相手にたいする思いやり」も「こちらの意図」も通じなかった例である。「相手に対する思いやりの心」は，日本人同士であれば「ハッキリと言葉にしなくとも」何となく理解が出来るが，カナダ人に対しては「カナダ人が分かる」ような表現をすることが必要である。それは，「英語ではなさないと」という固定概念からの脱却であり，まずは日本語で気持ちを表わすことである。それで通じなければ，それ以外の方法，例えば紙に書いたり，身振り手振りなど，ともかく「分かり合いたい」という「思いを形にする」ことである。もっとも，「英語に接する機会があるから」とか「英語を学べるから」などの理由でホームステイを引受ける人も居るかも知れないが，最も重要な事は「分かり合う」

という意欲と行動であろう。

第四に，料理に関しては，「好き嫌い」や「食べ残し」が一目で分かる「一人前のセット」よりも，バイキング形式が適切であると思われる。受入側とすれば，日本では日本料理を食べてもらいたいという気持ちがあるし，相手が「日本食を」と望む場合もある。しかし，相手が望んだとしても，実際には箸をつけたものの食べられないという場合もある。従って，食事については，和食にしろ洋食にしろ「バイキング形式」が「問題解決メニュー」であろう。「一人前のセット」という形式であれば，食べられない場合には食べ残しが一目瞭然であり，日本側にとってもカナダ側にとっても，バツの悪い状況となる。バイキング形式であれば，このような事は起こらない。未知の日本料理にチャレンジも出来るし，食べられなければ一口だけでストップすることが可能である。ランチにお弁当などを出す場合にも，このような事を考慮しておくことが大事だと思われる。

第五に，牛久のプログラムの特徴は，教室でのEFLなどの集中英語コースとは対極にあり，日本では出来ない様々なアクティビィティに取り組むという点である。アクティビィティにより言葉を越えることができるということを示している。乗馬，カヌー，モーターボート，水上スキー，トランポリンなど，初めてのアクティビィティに夢中になって取り組む過程で，心理的充足感が生まれるとともに，参加しているカナダ人とも心理的距離が縮まるという点にある。もちろん，これは次ぎに述べるように，ホワイトホースという環境だからこそ可能になったという面も大きい。

第六に，ホワイトホースという異文化の中だからこそ，可能になった側面も指摘しておかねばならない。日本の中では，新たな事にチャレンジしようとしても，周囲の目が気になるが，「一人ひとりが個性的である」ホワイトホースの環境では，周囲の目が気になることも無く「恥ずかしい」という思いとは無関係である。だからこそ，全く初めての乗馬もカヌーも水上スキーにもチャレンジできたのである。さらにまた，「異文化の中だからこそ」という点では，本論で触れた「食後の後片付け」についても当てはまる。日本では「後片付けを手伝うのは当たり前」という雰囲気もないし，

手伝おうという気持ちはあったとしても，高校生ともなれば，どうも素直に行動に移すことができない。これらの事も，全く環境が異なる異文化の中だからこそ，素直になることができ，何も言われなくともホストの家族と一緒に食事の後片付けなどを手伝うことになるのである。

第七に，牛久の高校生たちに見られる特徴の一つは，ホストファミリーに日本料理を作ってあげるという積極的な行動を取っているということである。もちろん，他の自治体の姉妹都市のケースにもそのような例は見られるが，牛久のケースの方がはるかに多いのである。こうして，料理を作って一緒に食べるという行為が，言葉のバリアーを越えて心理的距離を縮める結果となっている。しかし，ホストの人たちは，時には，「失敗作」も食べさせられているが，生徒たちの作った日本料理に好意的な様子である。それは，一つには「カナダの日本料理」の洗礼を受けているためか，味覚に対する許容度が非常に高いということであろう。同時に「日本贔屓」ということも大きく影響しているものと思われる。そうでなければ，高校生たちの作った日本料理も受入れられなかったかも知れない。

第八に，ホストファミリーの日本に対する強い興味と感受性，そして「分かり合おう」という情熱の存在が，牛久の高校生に強い感動を与えたと言える。ホストは，牛久の高校生たちの「たどたどしい英語をジッと待って聞いてくれ」て，分からなければ「やさしく言い換えてくれたり，ゆっくりと話してくれる」。こんな風に真剣に「人と接して分かり合おう」としたことは，それまで経験したことがなかったのである。さらに，カナダ人の家庭で，ご飯を炊いてくれたり，例えダシが入っていない味噌汁であったとしても，作ってくれるというだけで，嬉しくなるし相手の好意が伝わってくる。お寿司まで作ってくれて一緒に「ワサビゲーム」をして食べるとなると，それだけで感激ものである。こんな風に「分かり合おう」「喜んでもらおう」という積極的で好意的な態度が，牛久の高校生たちに居心地の良さとホワイトホースに対する愛着の情を与えたのである。

第九に，牛久の高校生たちは，カナダで「家族であるということ」は「どういう事なのか」を，肌で感じてきている。ホワイトホースの人たちが家

族を大事にして，家族と共に日常生活を送るということ。家族が一緒に食事をし，後片付けをし，散歩をし，ビデオを見るという日常生活。そして，終末には家族一緒にコテージに行き，時には友人を招いて，カヌーや水上スキーや魚釣りをしたりして，「家族で一緒に時を過ごす」というカナダ的生活。日本では，今や家族の生活の時間帯はバラバラで，食事を一緒にすることも少なくなり，それぞれが好きなビデオを違う部屋で見て過ごし，週末も休みの時も家族が一緒に何かをするということは，極めて稀なことになってきている。そんな日本からホワイトホースを訪れ，ホストファミリーの家族と一緒に過ごすということは，家族と繋がっているという安堵感と喜びに似た気持ちを経験させたのである。初めて出会った時は「姉妹都市からの訪問者」としてであった。そして，別れる時には「家族として」の別れとなったのであった。2週間という時間とホワイトホースという空間を共にすることにより「家族として受入れられた」という感覚が生まれていたのである。だからこそ，皆がみんな「帰りたくない」という気持ちを言葉で現しているのである。筆者は，これまでに40以上の姉妹都市を訪れ調査してきたが，全員があんなにも激しく「帰りたくない」と言っているケースは他には出会ったことがない。

さて最後に，本論で触れた牛久市の市民の間に存在する姉妹都市活動についての批判的意見に関して，本論から何が言えるのか述べておかねばならない。まず，疑問に思うことは，それらの人々は，ここで述べてきたような高校生自身が体験した様々な影響について知っているのだろうかと言うことである。次の簡単な事実を考えれば十分であろう。カナダ人家庭にホームステイすることにより経験した様々な事柄，そして，そこから生まれる自信，さらに自分自身を見つめ直し，これからの生き方を考えるということ，これらは全て牛久を出発する時には存在しなかったことである。高校生たちもそんな事になるとは夢にも思わなかった事なのである。カナダにホームステイすることにより，初めて生まれてきたのである。それは，生徒たち自らが，ハッキリと自覚をしていることでもある。これらの経験と生徒の中に起こる変化は，現在の日本の学校教育では決して与えること

が出来ないものである。牛久市は姉妹都市という枠組みの中で青少年訪問団を派遣することにより，将来を背負っていく青少年たちに，これらの贈り物を与えることができているのである。姉妹都市の中での派遣が，このような結果をもたらしているのである。それでも，依然として高校生を派遣することは不必要なことであるとの主張を続けることができるであろうか。

資料

- 「牛久町とホワイトホース市との姉妹都市提携に関する盟約：An Agreement of Friendship Between the City of Whitehorse and the Town of Ushiku」1985年4月19日，牛久町役場。
- 『広報うしく』，第856号，牛久市役所，平成15年5月1日発行。
- 『広報うしく』，第862号，牛久市役所，平成16年8月1日発行。
- 『広報うしく』，第872号，牛久市役所，平成16年1月1日発行。
- 『広報うしく』，第904号，牛久市役所，平成17年5月1日発行。
- 「昭和60年度設立総会議案」牛久・ホワイトホース姉妹都市委員会（昭和60年8月23日）。
- 『1998年度牛久市交換青少年事業報告書』，牛久市姉妹都市委員会，1998年。
- 『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』，牛久市姉妹都市委員会，2001年。
- 「平成15年度牛久国際交流協会設立総会」2003年6月8日。
- 「ホワイトホース市議会議事録」（Regular Council, June 14, 2004），
- 「ホワイトホース市行政サービス委員会議事録」，Minutes of the Meeting of the ADMINISTRATIVE SERVICES COMMITTEE Monday, March 7, 2005 Council Chambers, City Hall
- 「ホワイトホース市との交流」，牛久市役所。

参考文献

- 市岡政夫『自治体外交』日本経済評論社，2000年。
- 伊藤善市他編『自治体の国際化政策と地域活性化』学陽書房，1988年。
- 市岡政夫『自治体外交』日本経済評論社，2000年。
- 井上真蔵「異文化接触とコミュニケーション」，『北海道から』（特集：国際交

流の光と影）北海学園大学，1985。
・井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係 ── 何を学ぶか ──」，北海学園大学国際会議場，日加修好75周年・日本カナダ学会及び北海道カナダ協会創立25周年記念事業。『めいぷる』北海道カナダ協会会報第71号・創立25周年記念号，北海道カナダ協会，2004年10月31日。
・井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響 ── 江東区とサレー市のケースについて ──」，『人文論集』(26・27合併号)北海学園大学，2004年。
・井上真蔵「国際化の一側面 ── 北海道とカナダとの姉妹都市関係について ──」，『北見大学論集』北海学園北見大学，1993年。
・島袋邦・比嘉良充編『地域からの国際交流』研文出版，1986年。

インターネットのサイト

・牛久市国際交流協会について
http://www.ia-ibaraki.or.jp/ja/db/cia/cia017.htm
・牛久市の国際交流基金の設立について
http://www.city.ushiku.ibaraki.jp/reiki_int/reiki_honbun/z5000239001.html#j1
・牛久市の「16政策別の満足度及び重要度」について
http://www.city.ushiku.ibaraki.jp/section/seisaku/manzoku/h16ma/16ma_kekka2.htm
・牛久市文化芸術の振興に関する基本的な方針について
http://www.city.ushiku.ibaraki.jp/section/tyuuoukouminkan/kihonhousin/kihonmokuzi.htm
・「カナダ・日本姉妹都市リスト」，カナダ大使館ホームページ
http://www.canadanet.or.jp/p_c/sistercity.shtml
・「昭和時代の牛久」について
http://www.city.ushiku.ibaraki.jp/new_homepage/ushikushitoiumachi/his/syouwa.htm
・「数字で見る牛久市」
http://www.city.ushiku.ibaraki.jp/whatushiku/toukei.htm
・「世界と地域に友情の輪を広げる国際交流の推進」── 姉妹都市交流について ──，牛久市政策秘書課のホームページ
http://www.city.ushiku.ibaraki.jp/section/seisaku/manzoku/h15ma/

15ma_iken16.htm
・日本の国土について，総務省統計局
http://www.stat.go.jp/data/nihon/01.htm
・ホワイトホース市 Parks and Recreation Department について
http://www.city.whitehorse.yk.ca/index.asp?Type＝SEC&SEC＝{A5849227-F6AB-4707-9575-C1E0C22716D9}&DE＝{47FA6648-2D91-40D5-91E6-D84057CA1185}
・ユーコン観光局，Tour Yukon，Tourism Yukon Information
http://www.touryukon.com/
・ユーコン観光局，Tour Yukon（日本語版）
http://www.yukonjapan.com/
・ユーコンのデータについて，Canada-Information at a Glance
http://www.canadainfolink.ca/chartone.htm